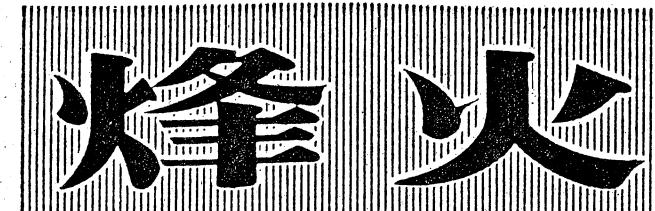


☆帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争—世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

1976年
9月15日
第305号
編集発行人 高木一夫
一部 150円



共産主義者同盟（全国委員会）

大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄川崎町
3の24 とみやビル15号

TEL (06) 371-3706

天皇50年記念式典粉碎！ 三里塚鉄塔決戦勝利！

全国の闘う労働者人民の同志諸君！
76年前半期の闘いを勝利的に打ちぬいた我々は、ここに今秋闘争の闘争宣言と熱い連帯の檄を送る。
わが共産党（全国委）党内分派闘争は、75年春、中央集権非合法党建設の試練の道から最終的に逃亡し、反革命マル主義への転落をとげた加納一派への完全打倒闘争の勝利的貫徹をもって明確に新たな段階に突入した。加納一派は我々の追撃におびえ赤軍派の清算主義一分派である「プロ編」と野合し「紅旗」結成へと逃げこんだ。我々はこれを勝利のメルクマールとして我々と加納一派との分派闘争が党派闘争に転化したことを宣言した。即ち現代過渡期世界の終幕期「戦争と革命の時代」に於ける革命党と反革命党との武装党派闘争としてわが共産党（全国委）党内分派闘争は革命的発展を戦取したのである。我々にとり加納一派完全打倒闘争は長期にわたる革命党建設と革命運動の途上での不可避の闘いであり、彼ら反革命集団の完全解体戦でありながらもしかしそれは自己完結するものではない。更に我々には世界的物質的基盤にそびえたつ帝国主義、社会帝国主義打倒の全面戦争に全世界のプロレタリア人民を率いて勝利する任務が課せられているのである。

今春期から夏期にいたる闘いは、我々と日本プロレタリアート人民の内に、このゆるぎない路線的核轍をしっかりと刻印した。この勝利の基礎の上に我々は帝国主義社会帝国主義の世界史的掃討を実現しうる國際主義で武装せる鉄の中央集権非合法党建設の一層の前進をわが手中にしなければならない。

今日、帝国主義はますます政治的経済的軍事的危機を深めている。戦後ヤルタ・ジュネーブ体制の崩壊、ひきつづく國際階級闘争・國際共産主義運動の前進の中で、帝国主義列強はソ連社帝を頭目とする國際社帝潮流をその延命の「左」足としてまきこみながら、侵略反革命－新植民地主義をつよめ戦争と戦争挑発を各地でくりひろげている。この世界的白熱の焦点が米帝のベトナム敗退以降の朝鮮半島である。アジア、朝鮮を主戦場とする帝国主義・社会帝国主義・民族解放－社会主義勢力の大激突は、世界が再び50年代後半から60年代前半のあの「相対的安全期」と呼ばれた時代に回帰するのではなく、世界的規

模での社会主義革命の勝利の時代に向かって歩みつけていることをこのうえなく明らかにしている。

アジア人民と日本人民の頭上に君臨せんとする我が日本帝国主義は、他ならぬこの朝鮮への侵略反革命を先陣きつて激化させる以外に、どのような危機回避の手段ももたないという点において諸帝国主義に比してさえ危機は一層深刻なものである。日帝は南朝鮮新植民地主義支配と沖繩侵略反革命前線基地とを連結させた日米安保の攻撃的な再編、そして国内の官僚的警察的独裁支配の暴力的強化以外に帝国主義として生きのびるすべがないのである。ロッキード疑惑→田中逮捕という政治的危機の鎮静化、階級的流動の反革命的統合をねらつて日帝は政治的反動の嵐を吹き荒れさせつつ、その頂点に最大の切り札として天皇50年記念式典開催をうち出した。

すべての闘う同志・友人諸君！ 国際主義の総路線で



^7-8 安保協議粉碎闘争に決起！

板門店戦争挑発弾劾

日米帝の朝鮮侵略反革命を内戦に転化せよ！

南の反独裁民主化闘争の虐殺であり、これらを統合するものとしての南北分断固定化攻撃である。彼らは板門店事件の戦果ならぬ戦果に嬉々とし、今秋の第31回国連通常総会（9月21日開催朝鮮討議）に向けて「11ヶ国共同決議案」を提出し再び新たな策動を開始している。彼らの目論みははつきりしている。決議案は主文4条からなり、①再統一達成のための条件の確立②南北朝鮮の対話の早期再開③南北朝鮮とその他の当事者による現行休戦協定を永久的取り決めにかえるための交渉④すべての当事者の最大限の自制の4点を主張している。これは、これまでの案に比べ表現を柔軟にしながらも、米帝が引き続き韓国に駐

日米帝の板門店戦争挑発弾劾

事態と任務は鮮明である。58年スター・リン主義と訣別し、第一次共産同を結成し、60年代後半の大衆武装闘争を領導し、69年安保決戦敗北と70年7・7華青闘告発を契機とした革命的左翼の転換をおおしすすめてきた我々は今日、南北統一・社会主義革命へとむかう朝鮮民族解放闘争の歴史的前進への國際主義的連帶を通して、より一層の路線的武装とその物質化をかちとらねばならない。朝鮮人民を南北と北とに分断する38度線の障壁は、53年朝鮮解放戦争停戦、54年ジユネーブ条約をもつて最終的に確立された米帝・ソ連社帝の戦後支配体制の支柱をなしてきた。現在、ヤルタⅡジユネーブ体制の崩壊の中で、それは、米ソにとつてますます決定的な世界アジア支配の根幹をなしており、民族解放―社会主義勢力の前進に対する共通の防波堤として存在している。朝鮮人民はこの絞殺・圧殺策動に抗し、南北統一の勝利、完全な独立と解放をかけて、72年7・4南北共同声明をかちとり非同盟諸国会議、国連を通じた米日帝・朴との熾烈な攻防戦を開拓してきた。朝鮮侵略反革命との対決、朝鮮民族解放闘争との國際主義的連帶の闘いは、國際共産主義運動の大分裂を組織してきた民族解放―社会主義勢力の前進と歴史的結合を実現してゆく闘いであり帝国主義・社会帝国主義を世界的な政治的・経済的・軍事的基礎の根底から打倒してゆく巨大な一步を戦取する闘いである。

留し—2つの朝鮮を維持固定化しながら、侵略反革命の戦争と戦争挑発をたくらみ、このもとにソ連社帝など社帝潮流をひきずりこむことを画策するもの以外でない。すでに昨年12月に米帝・フォードは「新太平洋ドクトリン」において「米軍の軍事力が太平洋の安定の基礎であり、日本との協力が柱」「朝鮮半島の平和と安定に関与し続ける」等とその隠しようもない反革命的真意を公然とうち出しているのだ。必ずやこの野望は全世界人民、被抑圧民族の力によつて粉碎されるであろう。米日朴の反革命「11ヶ国共同決議案」を粉碎せよ。ソ連社帝の日米帝との「南北クロス承認」的結託を許すな。

東をうつと見せかけて、西を撃つ』』という一面的な情勢把握は、民族解放—社会主義勢力の主戦場たるアジアにおける帝国主義・社会帝国主義双方の反革命策動に大きな譲歩を与えるだけではなく、彼ら自身の歴史的革命的位置を一挙に喪失させる大きな危険をはらんでいる。今回の米日帝の板門店戦争挑発に対しても中国共産党はこれとの闘争を全世界の人民にむかって大胆に呼びかけ組織することができず、朝鮮労働党とのあつれきを深めた。我々は断固として、この民族解放—社会主義勢力内部の混迷の中に、「帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争—世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！」という我々の国際主義の総路線的スローガンと基軸をもちこみ革命的立場を推進してゆかねばならない。

革命的左翼の転換をおしすすめてきた我々は、今日、南北統一・社会主義革命へとむかう朝鮮民族解放闘争の歴史的前進への国際主義的物質化をかちとらねばならない。朝鮮人民を南と北とに分断する38度線の障壁は、53年朝鮮解放戦争停戦、54年ジュネーブ条約をもつて最終的に確立された米帝・ソ連社帝の戦後支配体制の支柱をなしてきた。現在、ヤルタリジュネーブ体制の崩壊の中で、それは、米ソにとつてますます決定的な世界一アジア支配の根幹をなしており、民族解放―社会主義勢力の前進に対する共通の防波堤として存在している。朝鮮人民はこの絞殺・虐殺策動に抗し、南北統一の勝利、完全な独立と解放をかけて、72年7・4南北共同声明をかちとり非同盟諸国会議、国連を通じた米日帝一朴との熾烈な攻防戦を展開してきた。朝鮮侵略反革命との対決、朝鮮民族解放闘争との国際主義的連帶の闘いは、国際共産主義運動の大分裂を組織してきた民族解放―社会主義勢力の前進と歴史的結合を実現してゆく闘いであり帝国主義・社会帝国主義を世界的な政治的・経済的・軍事的基礎の根底から打倒してゆく巨大な一步を戦取する闘いである。

かうことによってのみ世界的規模での社会主義の大道を導きうることを明らかにし、これをコミニンテルン（世界党）建設において実践せんとした。このレーニン主義に反逆し、スロシア国家力量の直接的波及の機関へと解体ターリンはコミニンテルン（世界党）をロシア国家の防衛と、ロシア国家生産力の吸合と、ジヨア民族主義・一国主義の鉄鎖でしばりつけた。中国・朝鮮・ベトナムなどの民族解放を当面の任務とする共産党・労働党はこのスターリンの指導を実質的に拒否し、国際共産主義運動の革命の一翼を形成し、ソ連共産党の社帝への転化（5年20回大会）、中ソ論争（60年代初頭）を期とし、それは、国際共産主義運動の大分裂へと発展したのである。しかし、これら民族解放－社会主義勢力の諸党委員会のスターリン主義に対する根底的批判の欠如は、スターリン主義の今日的帰結たる社会帝国主義の不断の反革命的介入・潜入を許さざるをえない余地と根拠を温存させている。それは、ソ連社帝の反革命性をもつとも鋭くあばき続け、これとの意識的闘争を組織してきた中国共産党の「ソ連社帝との反霸権闘争」の中に、逆に皮肉にも致命的限界としてあらわれている。すなわち、彼らの「反霸権闘争」における①反社帝一元論的立場は、日米帝との闘争において後退をもたらしており、②「第三世界論」の立場の固定化は先進国革命の敗北の問題から回避を招き、先進国社帝との本格的党派闘争を組織しえず、③社帝との闘争を「世界革命・世界プロ独」をめぐる国際党派闘争として組織しえないが故に、世界党建設を自己の任務として設定しえないこと――

打倒、社会帝国主義打倒の中央集権非合法党建設の前進をもつてする連帯でなければならぬ。この具体的準備と遂行なくしては國際主義は空文句である。中国共産党が中ソ論争において「抑圧民族のプロレタリア革命は、被抑圧民族の援助をうけることによってはじめて勝利する」いそそう大きな可能性をうることができるのである」とソ連社帝の社会主義勢力の大後方からの帝国主義足下プロレタリアート（党）への國際主義的連帶のよびかけでもある。1930年代と45年戦後革命期における2度にわたる先進国革命の敗北の流血の上に、帝国主義は延命をとげ、スターリン主義は社会帝国主義に転化した。社会帝国主義をひきづりこむことによつて帝国主義は特殊な延命のための物質的基礎を打ち固めてきた。今日、ヤルタリジュネーブ体制の崩壊下で帝国主義は民族解放—社会主義勢力の社会帝国主義化にますますその攻撃のねらいを定め包囲網を強化すると共に、国内における階級闘争の噴出を排外主義・社会排外主義のもとへと吸合せんとし、なりふりかまわぬ延命の道をひた走つてゐる。我々は、この帝国主義の総路線的攻撃をうち破る壮大な任務の最重要の環として自國帝国主義打倒の旗を掲げ、必ずや世界革命運動の焦点を先進諸帝国主義内部に移行させ、現代過渡期世界の根本問題たる先進国革命の敗北に決着をつけねばならない。この任務は唯一、國際主義で武装した武装蜂起を組織する中央集権非合法党建設によつての党組織論のレーニンによる物質化、すなわち、

レーニン主義路線の組織上の内実である。それは、実践的には、プロレタリアートの計画された武装蜂起の準備と組織化、プロレタリア独裁の準備と組織化が一方の軸であり、それは同時にもう一つの基軸、現下のプロレタリア大衆を我々の路線とその組織のもとに結集させるための大膽で公然たるたたかいの展

国際主義の旗をさらりに高く掲げよ

持続・拡大する革命的情勢の中で、我々は共産主義運動一党的路線とその深化をかけて、今秋期のたたかいを大爆発させなければならぬ。それ故に、同時に、武装蜂起とプロレタリア独裁の旗を、この激動期において、引き起こそうとする社会排外主義・右翼日和見主義との対決は、ますます重要なものとして存在している。帝国主義の危機と政治反動の強化の中で、不可避に決起するプロレタリアート人民の自然発生性をわが党的路線のもとに解体し、糾合しつくし、その巨大なエネルギーを共産主義運動の整然たる力強い前進にむけて解き放つ戦闘体制を構築せよ。今秋期闘争の全過程を、すべての同志・戦闘的労働者人民はその先頭に立ち革命的に牽引しよう。

日本帝国主義の死活をかけた朝鮮侵略反革命の遂行は、その対極に沖縄を要とする日米安保・侵略反革命同盟の再編・強化と国内のブルジョア専制支配の暴力的・強権的強化を生み出している。小ブルジョアジーは没落し、駆逐され、プロレタリアートに対してはその内部に帝国主義の代理人を育成しつつ、強権取・強收奪の攻撃を強化し、完全に全資本を系列化する金融寡頭体制はますます強化されている。ロッキード疑惑→田中逮捕という政治危機のさなか日経連・桜田は、自民党に少しがたつきがきても心配はない前置きしつつ「労使関係が安定し、警察・検察・裁判所・官僚組織さえ健全ならば、この混乱のはのりきれる」などと発言している。三木派・反三木派への自民党の分裂や、河野新党結成など、それ自身、ブルジョア政治委員会内部での抗争はきわめて激烈であり、それが政府危機の大好きな要因となつてはいるのであるが、日本国家権力を牛耳る、ほんのひとにぎりのものとも強大なブルジョアジーは直面する政治危機のもとと先を見越して政治を動かそうとしているのである。巨大な官僚・警察・軍隊機構を一層整備・肥大化させながら、この暴力はむき出しの、時には陰蔽され、幾重にも装置を背後にプロレタリアート人民への、時にとつてこの日帝国家権力の専制支配とのまつ向うからの対決を回避して前進は決してあ

りえない。対決からの逃亡は、排外主義への道であり、帝国主義の「左」足への道である。ロッキード疑惑によつてもたらされた政府危機と湧き起る階級的流動の一切を日帝は、朝鮮侵略反革命戦争への本格的のり出しの遂行のために、反革命的に統合し、鎮静化せんとやつきである。ブルジョア議員たちはロッキード事件の「大筋はもう出てしまっていりえない。対決からの逃亡は、排外主義への道であり、帝国主義の「左」足への道である。ロッキード疑惑によつてもたらされた政府危機と湧き起る階級的流動の一切を日帝は、朝鮮侵略反革命戦争への本格的のり出しの遂行のために、反革命的に統合し、鎮静化せんとやつきである。ブルジョア議員たちはロ

開、「宣伝・扇動・組織化」を推しすすめるものである。プロレタリア共産主義運動の勝利一階級の死滅に至るまで、予想できないくつの条件の変化に耐え、この2つの基軸を物質化してゆくたたかいこそ、我々の国際主義の基礎にしっかりとすえられなければなりません。

その当然の帰結としての総選挙準備の奔走であり、我々はこれらを打ち碎き、あらゆるプロレタリアート人民の憤激を武装蜂起の準備へと統合し、日帝の朝鮮侵略反革命とたたかう革命的政治闘争を組織せねばならない。

すでに、田中逮捕→板門店事件を大きな施回点とし帝国主義の新たな攻撃は開始されている。今秋、日帝は、小選挙区制、新入管法、刑法改正→保安処分、日韓定期閣僚会議などをさまでいいばかりの反動攻勢を一挙におし進行のため、反革命的に統合し、鎮静化せんとやつきである。ブルジョア議員たちはロ

更にこれらと結合して進行する日米安保同盟の強化、その軍事的支柱たる沖縄基地を朝鮮直接出撃拠点としてうちかためんとする日中・橋本・佐藤らが泥をかぶることによって、ロッキード事件は終焉したと宣言しているのである。社共流のそして革マル・4トロ・加納一派流の「真相究明」という見地に立てば、確かに「大筋はもう出てしまった」のであり、残るはもとと沢山の高官名をもとと沢山の自民党の腐敗の暴露をノ」という弱々しい要求だけである。たしかに次の点一児玉・岸・椎名と連なる韓国ロビイストのルートと、ボストン四次防の次期対潜しよう戒機選定をめぐつた事態のはとんど大部分の核慈的な点については日帝は絶対にかくし通そうとするだろう。なぜならばそれは朝鮮侵略反革命遂行のための、南朝鮮新植民地主義支配・沖縄侵略反革命前線基地日米安保の強化という生命線に深くかかわる事柄であるからである。しかし、我々は「自民党政治の腐敗の暴露」の中に日本プロレタリアートの直面する任務を解消するわけにはいかないのだ。彼ら社共の補完物

日本帝国主義の戦後の復活と復興、65年日韓条約を通じたアジア侵略反革命への公然たるのり出し、すなわち戦後一貫して民族解放社会主義勢力との対峙の中で自己を世界帝国主義の強力な一翼として形成してきた日本帝国主義の帝国主義としての本質から生み出された不可避の産物であり、日帝はその「收拾」を通じて官僚的警察的独裁の飛躍的強化をはかり、すさまじい勢いで侵略反革命戦争遂行体制を目論んでいるということを見ようともしない。だから帝国主義が田中逮捕を決断し、ロッキード事件が收拾の過程に入るや、「田中逮捕は人民の勝利。人民の力で自民党政府打倒を」（4トロ）とブルジョア的反政府運動の一翼へと双手をあげて合流し官僚的警察的独裁支配の強化に武装解除をよびかけてい

るのだ。今秋期闘争の入口において社会排外主義・右翼日和見主義と革命的左翼の政治的・実践的分歧は鮮明である。前者は「三木の手で真相の徹底究明を！」（社共）「ブルジョアジーに真相究明はできない。プロレタリアートの手で！」（加納一派）路線であり、その当然の帰結としての総選挙準備の奔走であり、我々はこれらを打ち碎き、あらゆるプロレタリアート人民の憤激を武装蜂起の準備へと統合し、日帝の朝鮮侵略反革命とたたかう革命的政治闘争を組織せねばならない。

すでに、田中逮捕→板門店事件を大きな施回点とし帝国主義の新たな攻撃は開始されている。今秋、日帝は、小選挙区制、新入管法、刑法改正→保安処分、日韓定期閣僚会議などをさまでいいばかりの反動攻勢を一挙におし進行のため、反革命的に統合し、鎮静化せんとやつきである。ブルジョア議員たちはロ

更にこれらと結合して進行する日米安保同盟の強化、その軍事的支柱たる沖縄基地を朝鮮直接出撃拠点としてうちかためんとする日中・橋本・佐藤らが泥をかぶることによって、ロッキード事件は終焉したと宣言しているのである。社共流のそして革マル・4トロ・加納一派流の「真相究明」という見地に立てば、確かに「大筋はもう出てしまった」のであり、残るはもとと沢山の高官名をもとと沢山の自民党の腐敗の暴露をノ」という弱々しい要求だけである。たしかに次の点一児玉・岸・椎名と連なる韓国ロビイストのルートと、ボストン四次防の次期対潜しよう戒機選定をめぐつた事態のはとんど大部分の核慈的な点については日帝は絶対にかくし通そうとするだろう。なぜならばそれは朝鮮侵略反革命遂行のための、南朝鮮新植民地主義支配・沖縄侵略反革命前線基地日米安保の強化という生命線に深くかかわる事柄であるからである。しかし、我々は「自民党政治の腐敗の暴露」の中に日本プロレタリアートの直面する任務を解消するわけにはいかないのだ。彼ら社共の補完物

日本帝国主義の戦後の復活と復興、65年日韓条約を通じたアジア侵略反革命への公然たるのり出し、すなわち戦後一貫して民族解放社会主義勢力との対峙の中で自己を世界帝国主義の強力な一翼として形成してきた日本帝国主義の帝国主義としての本質から生み出された不可避の産物であり、日帝はその「收拾」を通じて官僚的警察的独裁の飛躍的強化をはかり、すさまじい勢いで侵略反革命戦争遂行体制を目論んでいるということを見ようともしない。だから帝国主義が田中逮捕を決断し、ロッキード事件が收拾の過程に入るや、「田中逮捕は人民の勝利。人民の力で自民党政府打倒を」（4トロ）とブルジョア的反政府運動の一翼へと双手をあげて合流し官僚的警察的独裁支配の強化に武装解除をよびかけてい

るのだ。今秋期闘争の入口において社会排外主義・右翼日和見主義と革命的左翼の政治的・実践的分歧は鮮明である。前者は「三木の手で真相の徹底究明を！」（社共）「ブルジョアジーに真相究明はできない。プロレタリアートの手で！」（加納一派）路線であり、その当然の帰結としての総選挙準備の奔走であり、我々はこれらを打ち碎き、あらゆるプロレタリアート人民の憤激を武装蜂起の準備へと統合し、日帝の朝鮮侵略反革命とたたかう革命的政治闘争を組織せねばならない。

すでに、田中逮捕→板門店事件を大きな施回点とし帝国主義の新たな攻撃は開始されている。今秋、日帝は、小選挙区制、新入管法、刑法改正→保安処分、日韓定期閣僚会議などをさまでいいばかりの反動攻勢を一挙におし進行のため、反革命的に統合し、鎮静化せんとやつきである。ブルジョア議員たちはロ

更にこれらと結合して進行する日米安保同盟の強化、その軍事的支柱たる沖縄基地を朝鮮直接出撃拠点としてうちかためんとする日中・橋本・佐藤らが泥をかぶることによって、ロッキード事件は終焉したと宣言しているのである。社共流のそして革マル・4トロ・加納一派流の「真相究明」という見地に立てば、確かに「大筋はもう出てしまった」のであり、残るはもとと沢山の高官名をもとと沢山の自民党の腐敗の暴露をノ」という弱々しい要求だけである。たしかに次の点一児玉・岸・椎名と連なる韓国ロビイストのルートと、ボストン四次防の次期対潜しよう戒機選定をめぐつた事態のはとんど大部分の核慈的な点については日帝は絶対にかくし通そうとするだろう。なぜならばそれは朝鮮侵略反革命遂行のための、南朝鮮新植民地主義支配・沖縄侵略反革命前線基地日米安保の強化という生命線に深くかかわる事柄であるからである。しかし、我々は「自民党政治の腐敗の暴露」の中に日本プロレタリアートの直面する任務を解消するわけにはいかないのだ。彼ら社共の補完物

日本帝国主義の戦後の復活と復興、65年日韓条約を通じたアジア侵略反革命への公然たるのり出し、すなわち戦後一貫して民族解放社会主義勢力との対峙の中で自己を世界帝国主義の強力な一翼として形成してきた日本帝国主義の帝国主義としての本質から生み出された不可避の産物であり、日帝はその「收拾」を通じて官僚的警察的独裁の飛躍的強化をはかり、すさまじい勢いで侵略反革命戦争遂行体制を目論んでいるということを見ようともしない。だから帝国主義が田中逮捕を決断し、ロッキード事件が收拾の過程に入るや、「田中逮捕は人民の勝利。人民の力で自民党政府打倒を」（4トロ）とブルジョア的反政府運動の一翼へと双手をあげて合流し官僚的警察的独裁支配の強化に武装解除をよびかけてい

キヒトを政治の前面におしたてての天皇制・天皇制イデオロギー攻撃に他ならず、階級闘争と革命党への一挙的壊滅攻撃に他ならない。我々は今秋期闘争の最大の第一の政治的任務として、すでに閣議決定された11月10日、「天皇在位50年記念式典」粉碎闘争を全力をあげたたかいぬかねばならない。昨年、皇子沖繩上陸、天皇訪米を全人民の怒りの声の中で強行した日帝は、いよいよ重大な反革命的決意に満ちて、天皇制・天皇制イデオロギー攻撃を警察的・官僚的独裁支配の政治的支柱たる位置にすえ、全力重をかけて激化せんとしている。天皇制こそ、第二次帝国主義戦争におけるアジア人民大虐殺の張本人であり、アジア民族解放闘争に対する侵略反革命戦争の統帥者である。戦後革命の流産、日共のスターリン主義的屈服の中で象徴天皇制として延命をとげ、日帝の復活のかくされた支配の基礎として存続してきた天皇制は、いま日帝の危機突破の最大の政治的支柱としてその野望をむき出しにしている。昨年の「第2次大戦の責任は軍部にあり、私にはない」「広島への原爆投下はしかたがなかった」「戦後まだ一度も行っていない沖縄に是非行きたい」などの許すまじき天皇の反革命暴言はそつくりそのまま日帝のドス黒い意図を忠実に表明するものである。「人間天皇」は、「戦後民主主義」支配体制(=ブルジョア共和制)からブルジョア専制支配への推転の中で、急速に、日帝の侵略反革命の「象徴」としての座につかんとしているのだ。あらゆる小ブル的部分の雪崩をうつた屈服が公然化している。口先だけの弱々しい「天皇制反対」をとなえてきた社会排外主義者が、昨年、沖縄・羽田

においてあからさまに示した「天皇制に反対するか否かは個人の問題」「象徴天皇制には進歩的意図がある」(日共)「天皇は政治権力をもたない。天皇制との闘争などはアナクロニズムだ」(革マル)更に「天皇制イデオロギーを唯物史観で止揚する」(加納一派)なる屈服を再びおこなうのは目にみえている。彼らこそ天皇制・天皇制イデオロギーを唯一の武器で止揚する。我々は、昨年の7・17皇太子沖縄上陸阻止、ひめゆり・白銀決死糾弾闘争、9・30天皇訪米阻止闘争、本年1・17・18皇太子沖縄(伊江島)再上陸阻止本部現地闘争の革命的地平を継承し、天皇沖縄上陸策動を射程に入れた、朝鮮侵略反革命戦争遂行体制構築の要(天皇50年記念式典粉碎闘争を今秋期の全過程でたたかいぬき、これを必ず粉碎しなければならない。

第2の任務は、狭山最高裁決戦勝利の闘いである、10・31寺尾判決2周年糾弾/中央闘争を天王山とし、部落解放同盟との革命的共同闘争をうちかため、狭山差別裁判糾弾/無実の石川氏即時奪還/日帝最高裁—藤林・吉田体制打倒の全人民的昂揚をつくりあげねばならない。

第3の任務は、三里塚鉄塔決戦勝利のたなきである。10月半ばから11月はじめに決定したいといわれる敵、日帝・空港公団の岩山大鉄塔強制収容の攻撃を三里塚反対同盟との固い団結をもって粉碎しなければならない。三里塚闘争10年の、9・16戦闘を生み出した革命的地平を防衛し、鉄塔死守/開港粉碎/の決戦中の決戦として、すべての革命的労働者・農民・人民は三里塚の大地に全国から総結集せねばならない。

日帝の危機反革命突破と総対決せよ

以上の我々の九・十月の政治的任務はプロレタリアート人民内部に潜みプロレタリア人連絡と固く結び合わされない限り口先のタワゴトである」というレーニン主義は革命的プロレタリアートの合言葉とされねばならない。社会排外主義者の頭目、日共は国際社帝潮流の強力な一翼である。彼らの国際路線たる「自主独立、反米帝統一戦線」とは、日帝の独自の権益を小商品所有者たる小市民的立場から米帝・ソ連社帝等に対し主張する為の排外主義の紋章であり、またソ連社帝の民族解放・社会主義勢力の圧殺に歩調を揃えた社会帝国主義の旗印に他ならない。不破論文―13回党大会を通した日共のプロ独完全否定の宣言は日共六全協以降の当然の帰結としてのスターリン主義から社会帝国主義への転化が

においてあからさまに示した「天皇制に反対するか否かは個人の問題」「象徴天皇制には進歩的意図がある」(日共)「天皇は政治権力をもたない。天皇制との闘争などはアナクロニズムだ」(革マル)更に「天皇制イデオロギーを唯物史観で止揚する」(加納一派)なる屈服を再びおこなうのは目にみえている。彼らこそ天皇制・天皇制イデオロギーを唯一の武器で止揚する。我々は、昨年の7・17皇太子沖縄上陸阻止、ひめゆり・白銀決死糾弾闘争、9・30天皇訪米阻止闘争、本年1・17・18皇太子沖縄(伊江島)再上陸阻止本部現地闘争の革命的地平を継承し、天皇沖縄上陸策動を射程に入れた、朝鮮侵略反革命戦争遂行体制構築の要(天皇50年記念式典粉碎闘争を今秋期の全過程でたたかいぬき、これを必ず粉碎しなければならない。

第2の任務は、狭山最高裁決戦勝利の闘いである、10・31寺尾判決2周年糾弾/中央闘争を天王山とし、部落解放同盟との革命的共同闘争をうちかため、狭山差別裁判糾弾/無実の石川氏即時奪還/日帝最高裁—藤林・吉田体制打倒の全人民的昂揚をつくりあげねばならない。

①日帝免罪——すなわち、日本の支配者層は、戦後一貫して米帝の思いのままに動かされロッキード事件はその典型であつたとする対米従属の主張を全面開花させ、日帝の朝鮮侵略反革命とそれに伴う諸政治反動を免罪し内戦へ!」の日本プロレタリア人民の国際主義的任務に睡をはきかけ、武装蜂起の計画的準備を「小ブル急進主義、テロリズム」なる批判で罵倒し

②武装解除——すなわち、民族解放闘争への小ブルの讃美の立場にたち「侵略反革命を構築の要(天皇50年記念式典粉碎闘争を今秋期の全過程でたたかいぬき、これを必ず粉碎しなければならない。

③社共合流——すなわち、ポスト三木の受け皿を社共だけに任すなと同じ土俵に上りこみ総選挙の準備が全てであるとする日和見主義——。

これらの反動的本質を白日のもとにさらけ出してきた。反革命革マル主義者(=加納「红旗」)一派が他に先がけてこれらの先頭に立たんとしていることも隠しようもなく明らかである。今秋期、彼らは四トロの「われわれは…社共を中心とする労働者統一戦線にもとづく労働者・農民の政府を樹立する闘いに、ともに進撃しようと訴える」(9月6日「世界革命」)などというあからさまな社共排外主義政権構想への大合流宣言を筆頭に、プロレタリアート人民の革命的・政治的決起をしつぶし、10有余年にわたるスターリン主義、社会帝国主義との激しい闘争をもつて獲得してきた共産主義運動と革命党建設の偉大な地平を帝・社帝に売りわたさんと暗躍をくりひろげている。我々は今秋期、中央集権非合法党建設の大前進のもと、彼らとの非妥協のたかいをプロレタリアート人民をひきい、あらゆる階級闘争の領域において完遂しなければならない。

さて、これら右翼日和見主義にたいする一定の戦闘的位置を保有し、自国帝国主義の暴力的打倒を主張する革共同中核派についてである。彼らは、「朝鮮侵略戦争前夜論」にもとづく一連の政治闘争と革マル戦闘の展開を今秋期においても提起しているのであるが、板門店事件に際しての、「日米帝の朝鮮侵略戦争の攻撃が、北朝鮮スターリン主義(=金日成主義)の反プロレタリア的な軍事対抗措置をもテコとしてなされた」(8月30日付「前进」)なる主張にも限界は端的である。彼らは、現下の朝鮮半島をめぐる攻防が、つまり國際共産主義運動の前進と圧殺をめぐる攻防として、すなわち、朝鮮労働党→日米帝・ソ連社帝という関係を現実上の基軸として事態が進展していることに目をつむり、結局の

反帝戦線の若き戦士先頭に

7~8月激動をたたかいぬく

全国の革命的労働者人民、「烽火」読者諸君！

我が反帝戦線（全国委）は、7・8安保協決戦を首都総力決起で勝ちとった。同志達、思い起してもみよ！我々のこの勝利は、昨年、党内分派闘争の一撃の敗北から、反革命革マル主義加納一派の外化を許したことに対する痛苦な自己批判を賭けて「同盟再建・反革命加納一派完全打倒」を公然かつ大胆に宣言する中、これを合言葉に一切の試練をものともせず全党一丸となって闘い抜いた。とりわけ今春4・19を突破口とする全国政治闘争を、文字通り同盟再建をかけた死闘として、我々のもとの登場を許すことなく貫徹し、更に徹底した分派闘争の追撃戦を闘うことによって、加納一派は一年もたたぬうちに、重圧に耐えきれず赤軍派よりの最悪の清算主義者たるプロ編と野合し、「紅旗」結成へと逃げ込むことを通して、白色テロの一つも組織できず、自らの本来の生息地—右翼日和見主義の下へと逃亡しあつたのである。我々は党としての闘いを断固闘い抜き、その中で勝利をしたものとし、その礎を一つ一つ築き上げることを通して、武装蜂起—プロ独を組織する中央集権非合法党建設運動の路線的勝利を戦取すべき激烈な党派闘争として、そして何よりも日本プロ人民の民族解放—社会主義勢力就中朝鮮人民との連帯をかけた最も重大な国際主義的任務として、社会排外主義・右翼日和見主義・急進民主主義をして、危機にあえぐ帝国主義の取る道が、社会帝国主義をまき込みつつ、朝鮮南北分断固定化—朴独裁政権の死守をかけた日米韓反革命体制の打ち固め、侵略反革命体制の構築と民族解放—社会主義勢力の前進の阻止・破壊であること、とりわけ日本帝国主義にとって朝鮮侵略反革命—南朝鮮新植民地主義支配の貫徹こそが不可欠の環であり、7・8日米安保協—防衛協力委の設置は、「極東の平和と安全」のための戦闘行動としての、在日米軍

余日、帝国主義・社会帝国主義・民族解放・社会主義勢力との革命と反革命の大激突の主戦場たるアジアにおいて、危機にあえぐ帝国主義の取る道が、社会帝国主義をまき込みつつ、朝鮮南北分断固定化—朴独裁政権の死守をかけた日米韓反革命体制の打ち固め、侵略反革命体制の構築と民族解放—社会主義勢力の前進の阻止・破壊であること、とりわけ日本帝国主義にとって朝鮮侵略反革命—南朝鮮新植民地主義支配の貫徹こそが不可欠の環であり、7・8日米安保協—防衛協力委の設置は、「極東の平和と安全」のための戦闘行動としての、在日米軍



〈7・8首都・宮下公園〉

7.8

朝鮮人民・沖縄人民と連帶し 日米安保協粉碎闘争に決起

全国の革命的労働者人民、「烽火」読者諸君！

の基地の無制限使用・自由発進そして自衛隊との共同軍事行動・防衛分担、更には「基盤防衛力構想」と結びつき、自衛隊の飛躍的強化—行動範囲の拡大・実戦部隊化として、韓国を「直接的前方防衛地域」沖縄を「出撃拠点」とする、日米韓反革命体制の枢軸を担う安保の質的強化・日米共同作戦体制の強化を通じた文字通りの朝鮮侵略反革命戦争遂行体制構築としてあつたのである。これに対し、日共を頭目とする社会排外主義者共は、「平和共存」路線に見られる様に民族解放—社会主義勢力に対する路線的敵対—社共排外主義政権構想をおしたてての武装反革命として登場し、革マル派は、社共排外主義政権構想への弱々しい不平不満者—日共に劣らぬ社会排外主義として「ロックード反戦闘争」と小ブル平和主義をさらけだし、日帝の侵略反革命との対決に真向から敵対した。更に右翼日和見主義の革マル主義への水先案内人加納一派そして四トロを筆頭とする右翼日和見主義は、「資本主義の腐敗糾弾」とばかりに、安保協決戦から逃亡し、「日和見主義の社会排外主義への転化」を

ところ、一国主義的に閉ざされた日帝打倒の問題へと一元化せしめてゆくのである。さらに、朝鮮労働党の日米帝への反撃が、日米帝の朝鮮侵略反革命のテコという主張は、まったくの観念論であるばかりか、激成される日帝の反共—排外主義的扇動に一片の余地を与えるものである。総じて、彼らの現在の路線上の基軸をなす「戦争前夜論」は、60年代における彼らの「ベトナム戦争II帝とスタの代理戦争論」と決定的分岐を画するものではなく、不断に帝国主義との総路線対決を、政策阻止闘争の尖鋭化に転落させ、社会帝国主義

(スターリン主義)とのたたかいを路線問題としてではなく「思想問題」に解消させる危険をはらむものである。この限界とむすびついて、彼らの急進民主主義的政治闘争は存在しているのである。

すべての労働者・人民の同志・友人諸君！
アシア民族解放—社会主義勢力のひきづり前進にこたえ、危機にのたうつ日米帝の朝鮮侵略反革命との徹底した対決を、9—10月闘争の我々の全国政治闘争の中心にすえ、
「南朝鮮新植民地主義支配—沖縄侵略反革

命前線基地粉碎！ 安保粉碎！ 日帝打倒！」

「日帝の侵略反革命の要II官僚的警察的独裁支配粉碎！」

「社共排外主義政権構想を打碎き、右翼日和見主義を粉碎せよ！」

のスローガンを大胆に労働者人民の深部にまでもちこみ、天皇50年記念式典粉碎！ 狹山最高裁決戦勝利！ 三里塚鉄塔決戦勝利！ のたたかいを最後の最後まで闘いぬこう。我が党はその最先頭で全力をふりしぶってたたかうであろう。

体現しきつたのだ。この中にあつて中核派は、右翼日和見主義に対する一定の戦闘的位置を持ちつつも、反スター国主義的立場に規定されて、ますます急進民主主義的限界—社帝潮流に対する国際党派闘争に勝利できない弱点を暴露したのである。

7・8、「侵略反革命阻止全国政治共闘」を領導する我が反帝戦線（全国委）は、炎天下、首都宮下公園へ革命的に武装した真紅の大部隊を登場させた。我が精鋭部隊は集会場中央を陣取り、前段集会を貫徹する。全国から決起した諸地方・諸戦線の同志の、7・8安保協開催に対する怒りと国際主義に燃えた決意表明が続々と行なわれる中で、中央集会の開催が宣せられる。基調報告と諸団体の発言を受け、決意表明に立った反帝戦線（全国委）の同志が、大きな「異議なし」の声に迎えられる。同志は大胆かつ鮮明に革命党と日本プロ人民の任務を提起した。同志はとりわけ「国際共産主義運動の最前線たる民族解放社会主義勢力、就中朝鮮人民と、我総路線」を火急の任務として闘い抜かねばならないことを強く主張した。

7・8決起は、島津藩の琉球侵略、とりわ

7・8、「侵略反革命阻止全国政治共闘」を领导する我が反帝戦線（全国委）は、炎天下、首都宮下公園へ革命的に武装した真紅の大部隊を登場させた。我が精鋭部隊は集会場中央を陣取り、前段集会を貫徹する。全国から決起した諸地方・諸戦線の同志の、7・8安保協開催に対する怒りと国際主義に燃えた決意表明が続々と行なわれる中で、中央集会の開催が宣せられる。基調報告と諸団体の発言を受け、決意表明に立った反帝戦線（全国委）の同志が、大きな「異議なし」の声に迎えられる。同志は大胆かつ鮮明に革命党と日本プロ人民の任務を提起した。同志はとりわけ「国際共産主義運動の最前線たる民族解放社会主義勢力、就中朝鮮人民と、我総路線」を火急の任務として闘い抜かねばならないことを強く主張した。

7・8決起は、島津藩の琉球侵略、とりわ

7.17

7.17 ひめゆり・白銀決起一周年

全関西集会がちどる

全国の烽火読者諸君！

姫百合ー白銀に燃え上がった炎が、海洋博名譽総裁としての皇太子沖縄上陸にこめた日帝の野望を焼き尽して一ヶ年。我々は革命的沖縄青年と共に、労働者・学生・市民の圧倒的結集の下に、「7・17姫百合ー白銀決起一周年／反天皇制裁判勝利／四戦士奪還！」の沖縄ー「本土」一齊決起の一翼として全関西集会を開いた。時あたかも、「11・10天皇即位50年式典」が閣議決定される中、冒頭の事務局長山城氏の「沖縄解放にとって、天皇制との闘いは不可避である」なる戦闘宣言を最先頭に、反証段階を迎える。姫百合ー白銀公判を反天皇制裁判として闘う体制を構築すると共に、反天皇制闘争を闘い抜く決意を不動のものとして打ち固めた。

7・17沖縄同戦士の決起は、沖縄戦を踏まえる事を通して、「皇太子沖縄上陸には、反対も賛成もしない」あるいは「天皇制との闘争はアナクロニズム」なる天皇制（イデ）攻撃への屈服を頂点に、復帰運動を逆手に取った日帝の7年沖縄「返還」攻撃と、その総決着をかけて打ち下ろされる米軍・自衛隊基地の強化を中心とした農漁民からの土地と海の強奪、全軍労の大量解雇、沖縄からのたたき出しとして推進される反基地勢力の解体等、沖縄を「基地とCTS」と買春観光の島へと大改造せんとする海洋博攻撃に屈服する社共、社大党、革マルの沖縄闘争終焉論者を打ち碎き、沖縄階級闘争の真只中に沖縄解放同盟を登場せしめた。

7・17決起は、島津藩の琉球侵略、とりわ

の下、革命的連帯をなし、国際主義で貫く事を通して、『南朝鮮新植民地主義支配ー沖縄侵略反革命前線基地粉碎／安保粉碎／日帝打倒！』『日帝の侵略反革命の要ー官僚的警察的独裁支配粉碎！』『社共排外主義政権構想を打ち碎き、右翼日和見主義の合流を粉碎せよ！』を火急の任務として闘い抜かねばならないことを強く強調し、全同志の一層の奮起を促した。

我が同志の発言をガッチャリ確認した我が部隊は、荒々しい気迫を漲せ、宮下公園を出発し戦闘的デモを貫徹した。そして文字通りブランド魂が爆発したのである。機動隊の阻止線への突撃が敢行され、盾が蹴破られ阻止線が揺らぐ。我が部隊は敢然と阻止線をぶち抜き進撃したのである。

全ての同志諸君！ 7・8安保協決戦を頂点とする今春期全国政治闘争の成果を打ち固め今秋闘争の大爆発を戦取しようではないか。

け一八七九年「琉球処分」以降の「ソテツ地獄」等の軍隊・警察権力を以つてする歴史的な差別支配を弾劾しつつ、同時にそれをテコとして「皇軍」の名の下にアジア侵略の尖兵へと仕立てあげられていた歴史を自己批判的に把え返す中で、「皇國の御盾」の怒号の下、沖縄民衆から食糧をはじめ一切合財を略奪し、壕から弾雨の中に追いたて、或いはスピード容疑を以つて、20万の沖縄民衆を「捨て石」として虐殺し、全島を灰塵に帰せしめた沖縄戦こそ、その集中的表現であることを鮮明にし、その頂点にある戦犯天皇ヒロヒトへの糾弾闘争として打ち抜かれた。「石をぶつけられても」と未曾有の大警備陣を以つても、皇太子が沖縄上陸を強行し、ながんずく沖縄戦の激戦地に踏みこんだ意図こそ、一滴の空涙で天皇一族の戦争責任を免罪し、沖縄戦を「聖戦」化し、沖縄階級闘争を天皇制・天皇制イデオロギー攻撃に屈服せしめ、沖縄侵略反革命前線基地の一挙的強化にあることを明白にし、断固たる戦闘を宣言したのである。この闘いは沖縄民衆と「本土」プロ人民との連帯の道を、自決権派の日和見主義を打ち碎き、指し示し、同時に天皇制との闘争を全人民的課題として突き出したのである。

この大爆発に恐怖した日本帝国主義国家権力は、宮城裁判長を先頭に有りとあらゆる天皇主義者を駆使して、公務執行妨害、礼拝所不敬罪等の罪条をデッチあげ、7・17決起があたかも「ひめゆり学徒隊の遺志」と対立する糾弾闘争であつたことを必死でおおい隠



アピールする桑原氏

定策動、血ぬられた戦犯天皇の即位50年式典の策動として天皇制・天皇制イデオロギー攻撃が強化され、侵略反革命（戦争）への動員

が策動されている今日にあって、7・17闘争の位置は増え決定的になつてゐる。我々は「民族解放—社会主義勢力の前進と結合し、日本プロの国際主義的任務をかけて、7・17闘争の発展を闘い取つていかねばならない。

現在、9・6公判を実質統一公判として闘い取つたとはいえ、日帝は死命をかけてこの闘いを破壊し、何が何でも天皇沖縄上陸を強行せんとしている。更に長期不当拘留・高額保釈金攻撃を粉碎し、いまだ獄中に奪われて

四 戦士を即時奪還せしめることは不可欠である。

止闘争公判 全国の革命的労働者・学生諸君！

我々は、反証闘争に勝利し、戦犯天皇・皇太子アキヒト・ミチコを法廷に引き出し、7・17四戦士の決死糾弾闘争の歴史的 地平を打ち固め、沖縄一「本土」を貫ぬく反天皇制裁判として、天皇制との闘争の一大橋頭堡としていかねばならない。同時に、天皇沖縄上陸天皇即位50年式典として強化される天皇制・天皇制イデオロギー攻撃と闘う組織として「支持する会」の強化を闘い取らねばならない。反天皇制裁判闘争勝利！
四 戦士即時奪還！

7.12

•30天皇訪米阻止鬭争公判 同志、堂々の意見陳述

全国の革命的労働者・学生の皆さん！
昨年9・30天皇訪米実力阻止闘争を我々は
諸党派のアリバイ闘争を弾劾しつつ、文字通り、
実力闘争として、四年ぶりと言われる政
治警察＝機動隊のガス弾の水平撃ち、放水、
白色テロをはねのけ、当日結集した一二〇〇〇
の部隊を最先頭で領導し、最後の最後まで闘
い抜いた。
それは昨7・17海洋博粉碎！皇太子沖縄上陸
阻止闘争を姫百合一白銀決死糾弾闘争とし
て闘い抜いた我々のみに可能な闘いであつた
のである。

面的転換＝官僚的警察的独裁支配に向けた権力の最後の切り札たる天皇の政治過程への登場、天皇制・天皇制イデオロギー攻撃をもつて帝国主義足下プロレタリアート人民を排外主義－差別分断支配に屈服せんとするものであり、それは、あの沖縄において明らかなるように沖縄人民の一貫した「反天皇・反大和・反基地」の闘いにに対する、72年5・15以降の権力の側からする決算なのでもあり、朝鮮侵略反革命に向けた攻撃に他ならなかつた。民族解放－社会主義勢力の巨大な勝利の中

で、曰帝の延命をねらつた天皇説米か。曰帝の國家権力の最後的なあがきであればこそ、権力は四年ぶりと言われるなりふりかまわぬ彈圧を加えてきたのである。

前回7月12日、第5回公判においては裁判官変更のため三名について三時間に及ぶ再度意見陳述がなされた。

四、戦士を即時奪還せしめることは不可欠である。
全国の革命的労働者・学生諸君！

対して、ソ連社帝を巻き込みつつ、真向から
の敵対一日米安保同盟の強化としてあつたこ
とを鮮明に暴露した。

以上を踏まえ、K同志は日帝国家権力一警察一検察一裁判所が一体となり、第一に、9・30闘争が戦犯天皇に向けられた闘いであるという厳然たる事実をインペイし、一般刑事事件として処理せんとしていること、第二に、公判のベースが二カ月に一回という早さで行なわれ、9・30戦士に早期結審一有罪判決を打ち落さんとしており、第三に、9・30当日の戒厳令はあらかじめ準備検挙を意志統一するものであつたことの暴露を通じ、この裁判がそれと一体のものとしてあることを弾劾し、

不当なデツチ上げ逮捕一起訴と断固闘い、この9・30裁判を一貫して反天皇制裁判として7・17裁判と連帶し、戦犯天皇を必ずやこの法廷へ引きづり出すことを明らかにし、反天皇制を闘う人々、沖縄人民、中朝アジア人民と連帶して闘う、という力強い『戦闘宣言』を発したのである。

全ての革命的労働者・学生の皆さん！

我々、反帝戦線（全国委）は、昨7・17、9・30、本年1・17闘争で勝ち取った地平を一步たりとも譲り渡すことなく、社会排外主義、それに合流する右翼日和見主義を、とりわけその頭目たる共産同党内分派闘争からの脱走分子＝加納「紅旗」一派を完全打倒し、国際主義に武装された中央集権非合法党建設の巨大な前進で、11・10天皇50年記念式典粉碎！へ我々と共に断固決起することを訴える。

加納一派・千葉地裁・権力 一体となつた

全国の革命的労働者・人民諸君！

あいまつて増幅させ、何ら、相当な理由を明
らかにすることなく三同志を獄中につなぎと
めようとしているのである。

我々は、この様な地裁の暴挙を断固粉砕しなければならない。三同志の断固とした獄中闘争に悲鳴をあげ、権力は不适当に長期の拘留によって肉体的抹殺をもくろんでいるのであり、検察によりねつ造され、デツチ上げられた「殺人罪」攻撃が、公判廷において被告団、弁護人、傍聴団、によってその馬脚をあらわにされた事に対する権力側からの必死の巻き

返してある。

これは文字通り、我が同盟の加納一派完全打倒闘争に対する封じこめと、加納一派の育成をねらった、政治的決定であり、攻撃である。即ち、第五項とは、所謂、お詫まいり防止事項であり、反革命集団加納一派の意をうけて、公判廷、あるいは、あの千葉中央署での密室審理によつて空涙を流し、身の危険を訴え、庇護を乞うた加納一派の手先＝久松友子の言辞を、検察官の加納一派育成の方針と

我々はそれを許さないであろう。我々は、加納一派完全打倒闘争をさらに前進させるであ

ろう。そして、それは千葉地裁の検察官、加納一派一体となつた暴挙を粉碎し尽し、獄中三同志を即時奪還し、「殺人罪」デツチ上げを断固粉碎し近くす闘いでもある。

8.9～10
「障害者」解放運動の新たな出発
全障連結成大会に――

障害者】解放運動の新たな出発 全障連結成大会に一〇〇

八月九・十日にわたって、全障連（全国障害者解放運動連絡会議）結成大会が、全国から一千名の結集をもってかちとられた。この大会に先だつ社会排外主義者・日共の「全障争」との激しい闘争を経て「障害者」解放闘争の主体的全国的組織たる全障連が結成されたという事実が全障連の今後の重大な任務をはつきりと示している。即ち「戦争と革命の時代」に於ける日本帝国主義の南朝鮮新植民地主義支配の強化を軸にした侵略反革命戦争遂行体制としての日帝国内の全面的再編の中のでの労働者階級人民への差別分断攻撃、排外主義攻勢に屈服し自ら社会排外主義としての純化の道をひた走る社帝・日共をはじめ、それに合流する輩が右翼日和見主義として大きく抬頭しているという現下にあって、かかる部分との「障害者」解放闘争の路線をめぐる闘いを首尾一貫して貫徹する組織的武器が獲得されたのである。

「障害者」解放闘争の新たな段階を切り拓く歴史的大会の幕明けは、部落解放同盟大阪府連、島田事件対策協議会、全国精神病患者団体、赤堀さん等からの連帯アピール、大阪総評、市職労等からのアピールをうけて全障連全国事務局長より結成基調報告の提起によって行われた。基調報告は第一に、今日の「障害者」解放闘争の情勢がインドシナ民族解放闘争の完全勝利によって米帝の戦後世界支配体制が崩壊し、その中で危機を深める日帝が一方に於て米日韓一体化とアジア侵略を押し進め他方一切の矛盾をより一層の差別分断攻撃によつて労働者人民に転嫁せんとしている、ととらえ、第二にその下で「障害者」差別がかつてなく強化され「福祉」の虚飾する攻撃によつて打ち下ろされている。赤堀差別裁判、刑法改悪－保安処分新設、優生保護法改悪、七九年度養護学校義務化等々と打ち下ろされる「障害者」差別、完全抹殺の新たな攻撃を見定め、反撃の闘いを早急に準備せねばならないこと、第三にこの闘いが体制の補完物たる改良運動や利用主義、更には「国民党春にこそ存在することを鮮明に提起した。そして第四に、日共－全障研運動は「障害者」問題の基礎を資本主義社会にあるととらえず、解放闘争の主体を教師、親、専門家であると「障害者」解放を「障害者」を如何に健全者に近付けるか、として設定し（発達保障論）

9・27 第四公判に結集し、三同志即時奪還
「殺人罪」デッчи上げ粉碎！ 加納一派
完全打倒闘争勝利へ向けて決起せよ！

する代行主義であり、真向から解放闘争に敵対し権力と共に破壊攻撃を加えてきていることを暴露し、第五に、それ故に全障連結成の意義は、全障研などの融和主義を徹底糾弾する「障害者」の自立と解放の闘いを強化し権力の攻撃に対し全国的結集で闘うことであり、その現在の環が7年養護学校義務化阻止闘争と赤堀差別裁判糾弾闘争であると提起した。基調報告をうけた全体会議での論議、更には分科会に於ける「障害者」の労働権奪還を巡る激しい論議は「障害者」解放闘争が全障連の結成を組織的武器に根強い個別性、分散性を克服し日共一全障研との路線的分岐を闘いとり巨大な前進を掌中にする歴史的段階に突入したことを指し示した。だがこのことは同時に闘争を健全者の「恩恵」と「温情」へとおとしこめる日共一全障研の徹底した改

良主義社会排外主義に抗しての「障害者」解放闘争の推進にとどまらず、闘争の発展の過程で不斷に姿をかえてあらわれる右翼日和見主義の、糾弾を告発と自己批判に解消させてしまふ文集三編の項目につき我輩は聞く、今日我

9.1 関東大震災——朝鮮人・中国人大虐殺弾劾 朝鮮人民連帯集会かちとる

で、我が9・1集会は、「今こそ日本プロレ

タリアート人民は、朝鮮人民連帶の國際主義の赤旗をうちふり、日米帝の朝鮮侵略反革命と徹底対決せよ！」の新たな決意と戦闘宣言の下に闘いとられた。

日帝支配者階級は、我が革命的隊列に恐怖もあらわにし、政治警察を公然非公然にハイカイさせ、だが我々は王倒的労働者人民の結

集の下に集会を貫徹した。まず司会の力強い提起がなされる。「同志諸君！想起せよ！一

九二三年九月一日、六千数百名の朝鮮人・中国人が、支配者階級・政府・軍部によつて意図的・計画的に流され「流言」これらひづ

意図的・言説的におさかれて「演説」にもどり、
いて大虐殺された事実を！文字通りそれは、

と、そのもとでの階級的流動の一挙的噴出を恐れた支配者階級の大弾圧であり、日本人民

の屈服の姿に他ならなかつた。日帝はこれを無上のテコとし、一九一〇年日韓併合以来の本格的な朝鮮侵略を強化し、アジア全般へと

拡大せんがため、日本プロレタリアート人民の天皇制権力の下への排外主義的動員と統

合をおしすすめたのである。日本階級闘争は、この歴史的敗北を徹頭徹尾、国際主義の武装で打ちのこ已被つて、二を重ねて、し耗つて、

て革命的に克服することを要求され続けてきたのである。69年安保決戦敗北と70年7・7を契機とした革命的左翼の転換をおしはかつたのである。

電通労政の武装宣伝隊、地方大会・各支部大会会場前を完全武装制圧す

階級の闘いを封殺する社共、そしてその意をうけた民同は、とりわけ電通民同は帝国主義的労働運動への道をひき走っている。そのことは本年度の全電通の各大会ではつきりと宣言されている。そしてこの社共排外主義政権構想への大台流をはかる右翼日和見主義潮流——トロ・プロ青・加納一派——のなだれうつ抬頭は現下の情勢の大きな特徴の一つである。

とりわけ電通労政からの脱走者、反革命加納一派は労働組合運動への逃げこみと党的任務を労働組合運動の支援に切り縮めた結果、残された唯一の宣伝の場たる地方大会・支部大会への登場をもくろんだが、我が電通労政の密集せる武装宣伝隊の雄姿を見るやチリヂリに、あるいは、コソコソと逃げ出し、自らの反革命の姿を労働者人民の前にさらけだした。

又電通民同は、自己保身から、さすがに無害な加納一派には目もくれないが、○○支部における我が電通労政の革命的部隊を見るや政治警察に通報し、導入する等徹底した弾圧、攻撃をかけてきている。彼らは、誰がブルジョア階級にとっての眞の敵なのか、日帝や民同にとつて誰が最も恐しいのかをよく知っているのだ。我々はこれら、日帝（政治警察）、社共（民同）、右翼日和見主

全国の革命的労働者・「烽火」読者の皆さん！
日帝の侵略反革命－南朝鮮新植民地主義支配強化に屈服する社会排外主義者、右翼日和見主義者の拾頭の中、我が電通労政はこれらとの党派闘争を革命的プロレタリアートの国際主義上の任務として断固闘い抜き、日帝の排外主義攻撃に屈服し、排外主義政権構想を真っ向から掲げる社帝一社共、社民及びそれと合流する右翼日和見主義を断固粉碎する闘いと共に闘われんことを訴え、我々この間の闘いの報告をここに明らかにします。

「戦争と革命の時代」に於て、日帝の危機を左から補完せんと社会非主義攻撃の真をふり、その下へ労働者

てきた我々は、今日、南北統一―社会主義革命へと向う朝鮮民族解放闘争の歴史的前進に対する國際主義的連帶を通して、この敗北に決着をつけなければならぬ。かかる集会の位置を全体でしっかりと確認し、次に朝鮮連帯京都実行委の同志が壇上にあがつた。日米韓共同軍事行動体制の強化とあいまって、日本その熾烈さを増している在日朝鮮人民への制の下で、なおかつ不屈に展開される祖国統一の闘いを断固支持し、日本プロの國際主義的任务を鮮明に提起しきることと不可分のもとのとして、朝鮮人民―在日朝鮮人民との眞の結合が提起されねばならない事が、大胆にかつ具体的に提起され、その闘いの最先頭に、京都実行委がたつことを断固宣言した。つづく電通労働者政治委員会の決意表明は、本集会をより以上に活気づけた。今春闘争をその最先頭で闘い抜いてきた電通労政は、日本プロの朝鮮連帯闘争が不可避に社会排外主義とそれに合流し、屈服する右翼日和見主義との組織戦―党派闘争の強化を要請し、その闘いへの全労働者人民の統合をなし、プロの武装蜂起とプロ独を実現する準備を着々と遂行していくことが鮮明に提起された。そして最後

に、反帝戦線（全國委）の同志が集会をしめくくった。「戦後ヤルタ・ジュネーブ体制崩壊後の『戦争と革命』の世界史的時代における朝鮮半島をめぐって激烈に展開される帝国主義・社会帝国主義と民族解放－社会主義勢力の攻防戦に『日帝の朝鮮侵略反革命を内戦へ！』の旗高く、大胆に登場せよ！それが朴独裁政権下で不屈に闘う南朝鮮人民そして祖国の民衆と心を一つにして闘う在日朝鮮人民への連帯の唯一の道である！社共は社会排外主義として、ひたすらブルジョアジーとの連合を追い求め、反革命加納！『紅旗』一派を頭目とする右翼日和見主義者どもは、日帝との対決から逃亡し、中間政府を夢想しつつポスト三木の受け皿を社共だけにまかすなど総選挙の準備にやつきである。これら反動共を打倒し、武装蜂起を組織する中央集権非合法党の大前進をもって、今秋期、朝鮮侵略反革命粉碎！朝鮮人民連帯闘争の大爆発を勝ち取れ！武装蜂起を組織する中央集権非合法党建設の事業の下に大胆に結集せよ！」

同志諸君！ 今秋期9・1闘争を突破口に朝鮮人民連帯闘争の大爆発を勝ち取れ！武装蜂起を組織する中央集権非合法党建設の事業

このような情勢の中で電通民同は、全国大会―地方大
会―支部大会を日帝の除外主義攻撃に対する政治闘争を
回避することはもちろんのこと、徹頭徹尾ブルジョアジ
ーとの妥協と、日本プロレタリアートをブルジョアジー
に売り渡す内容で収約せんとしている。

に売り渡す内容で収約せんとしている。

「国民連合政権構想に基づく社会党の強化、選挙に勝利する」議会への一切の闘いの収約が最重要とし、春闘は「生きる権利を獲得する国民春闘であり、政府に対する経済的要求を「国民生活制度化要求として闘ったが2年連続の敗北に終った」とし、その敗北の根本原因

■電通労働者政治委員会機関紙

は、一総資本の側の參議院に於ける保革迫仲の緊迫した政治的な力関係からくる異常なまでの体制的危機」「個別的に資本と対決し、官民一体の総結集がなされなかつた」と総括して76春闘の雪辱は、2大國政選舉にすべての怒りを結集して政治の流れを変えることであると、排外主義政権構想に焦点をあてた徹底した排外主義ぶりを示し、官公労の先頭をきつて、帝国主義的労働運動への道を労働者大衆に呼びかけているのである。

　社民の国民連合政権と言おうと、日共の民主連合政権と言おうと、それらは南朝鮮新植民地主義支配強化を軸にした日帝のアジアへの侵略反革命に對して、日本プロレタリアートの國際主義的任務としてある「日帝の侵略反革命を内戦へ!」「自国帝國主義打倒!」を抜きにした排外主義政権としてあることにかわりはない。

務と自らの帝国主義の少しのおこぼれを受け
とらんがための自己保身をなさんと日帝の労
働手代としてその姿をあらわにしている。
それは又、「ケイワン」職業病の問題、「
障害者」就職差別の問題、等々としても彼ら
の排外主義ぶりが露骨にあらわれている。
まさに日帝の排外主義攻撃に屈服し、ブル
ジョアジーの良きパートナーとして、その姿
を増え鮮明にしている民同は労働組合運動の
指導部からひきおろさねばならない。

一方「自主独立」を掲げる社会帝国主義潮流
日共は、70年代中期階級闘争の爆発の中で
日帝の別動隊として、労働戦線、部落解放運動
を始め、戦闘的労働者人民への襲撃と組織
破壊をもつぱら自己の任務としてきている。
今春期彼らは、日帝の危機に対し労働者人民
の購買力の拡大・大幅賃上げによる日本経済
の危機の打開を提唱し、「革新統一戦線の結
成—議会闘争—民主連合政権樹立」の下に一

ならざるを得ない。革命的陣営の内部に送り込まれた最も成熟した右翼日和見主義、経済主義革マルがそうであるように、彼等の党派的根幹はレーニン主義の歪曲にある。であるが故に、彼等の実践は労働組合活動に限定されるのは当然であり、労働組合のほぼ全てが帝国主義的労働貴族に支配されている帝国主義本国の現状にあっては、彼等は互いに反発し合いながらも、からまり合い、もちつもたれつ、帝国主義を免罪し、プロレタリアートの決起を抑え込み、労働組合内に於ける共産主義者の目的意識的な宣伝、煽動、組織化の一切に敵対するのである。四トロは「社共は労農政府を樹立せよ」と要求し、社共の良き補完物であることを告白して、反革命加納一派にあっては、かのバラ色の未来を描いた「平和綱領」は殆んど社共の手の内のものであり、社共の方が加納一派より少しリアリストであるだけなのだ。

第29回大会で「『闘える組合が闘えない組合に合わせて一致点を見いだすことは必要であり闘える組合だけが集まって闘う』という考え方では、一部の労働者に満足感を与えたとしても闘いとして成功したとは言えない」と公労協がこれまでの闘い方を反省し、このような考え方を提示したのは初めてであり、各方面で論議を呼ぶことになりそうである」（読売新聞7／5夕刊）又電機労連への接近の具体案として「先に提起した通信機器を含めた全ての電機産業労働者の労働条件向上のための『産業対策連絡会議』に積極的に参加することを表明した」（同上）ことにもはつきりとしている。公社と一体となつた「近代的労使関係の確立」への推進として敵へ和解を求めるべきではないという、公社から委託された任

切を体系化し、日帝の侵略反革命に対する革命的政治闘争の否定、プロレタリアートの経済闘争、ストライキ戦術への敵対、中小商工業者への屈服を露骨に打ちだしている。かかる日共の対応は、国際的な西欧共産党の帝国主義ブルジョアジーとの「歴史的和平」自國帝国主義の利害の代弁、マルクスレーニン主義の公然たる放棄という先進国社帝潮流の拾頭と足並をそろえた体系的な武装反革命としての完成に根拠を有するものである。

我々は、このような社共との路線的分岐を労働者階級の闘いの真只中に組織せねばならず、同時に社共との党派闘争を組織しえず、それへの屈服を自らの路線の下地にしている四トロ、プロ青、加納一派等の右翼日和見主義者共をあとかたもなく粉碎せねばならない彼等右翼日和見主義の政治的路線的本性は経営主義であり、波等は必ず社会非外主義

このような右翼日和見主義者——社会排外主義者は共は、帝国主義の危機が深まれば深まるほど、帝、社帝により革命的プロレタリアートの陣営の中に送りこまれてくるのであり、層としての上層の労働者の現在的姿である。それ故、革命的プロレタリアートにとってこれらとの党派闘争は不可避であり、かつ、それに勝利せねばならず、我々は我々の社会主义革命の大道を切り拓く為に、その一切の成果を革命党建設に向け、この一年半の労政再建の闘争を通して、我々の立脚の基礎から解党主義をたたき出し、日本プロの前衛党建設をプロの武装蜂起——プロ独を組織する中央集権非合法党建設として戦取することこそ日本プロの全実践の目的に置くことを自らの組織の立脚の基礎としてきたのである。

10·3

三里塚現地決起闘争に

反帝戰線（全國委）三里塚現鬪寸

「送」を呼びかけ、増え強く打ち固められていく。

三里塚鉄塔決戦に総力決起し、三里塚闘争勝利に向けた新たな宣戦布告を宣言せよ！

同志諸君！すでに、三里塚現地では、風雲急を告げる鉄塔決戦攻防に向けて、着々と準

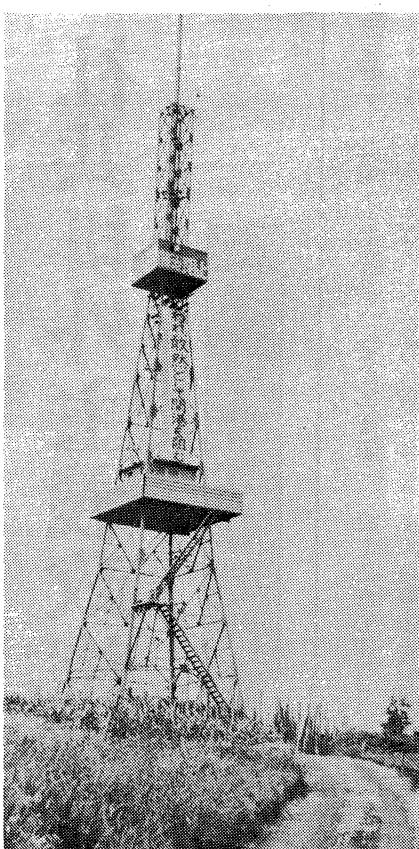
備が進められている。日帝の激しい農業破壊——棄民化攻撃と対峙しつつ、秋の収穫期を担

い、今、反対同盟を中心とした革命的労働者人民・農民の戦列は、鉄塔のヤグラを組み直し、権力一公団をにらみつけた鉄塔防衛隊の活動を一步も引くことなく繰り広げ、同時に全国の鉄塔10万共有者に向けた「内容証明郵

始している。「事業法認定期限切れ」を来年
に迎え、難行する燃料輸送、アクセス（交通）
問題、騒音公害問題 etc. に対する住民闘争に
直面しているのみならず、「空港政策」の全
面的破算を暴露されつつも、何がなんでも、
「フライ特・チエック」をデッチあげ、一挙
的に、これらの周辺住民、そして、全国基地
住民闘争を総破壊し尽さんと狙いつている
本年6月の虚実に満ちた六一項目にわたる

の間の東峰公判闘争、産土参道破壊道路建設阻止公判闘争における横田裁判長の反動的訴訟指揮（単独・スピード審理のみならず、被告の入廷を拒否し、これへの抗議に、被告を含む二名逮捕、三名入院で応え、あげくのはては、被告の意見陳述さえ却下するありさまである）、そして、現地における政治警察一機動隊の暴力的徘徊と白色テロル、これら一體となつた官僚的警察的独裁支配を駆使した

鐵塔決戦勝利！三里塚闘争の



岩山にそびえたつ大鉄塔
くわれ敢然として
開港を阻む

約60%、米販売農家の90%、米販売量65%を占める、土地耕作1.5ヘクタール以下の貧農・下層中農に対し、公然と土地売却・離農の促進をたたきつけ、強盗的な「土地・水・労働力の取り上げ」を更に徹底化するに至っているのである。

日帝の農民政策の本質は明らかであり、これとの総対決の道は、この日帝の侵略反革命と結合した農業破壊—棄民化攻撃との対決として、首尾一貫して、今日の日本プロ人民の国際主義的任務と結合し、ハプロレタリアートの武装蜂起—プロレタリア独裁権力樹立／たる権力奪取のスローガンの下に、噴激する日本農民運動を収束していくことに他ならない。

65年日韓条約、北爆開始の中で、日帝の農業破壊—棄民化攻撃の頂点として打ちおろされた農民からの強制的土地取り上げに対し、真向うからの闘いを担い抜いてきた三里塚革命的農民大衆の試練の一切は、この政治的に自覚された階級運動の組織化に、誇りをもつて結実させる時を迎えた。

同志諸君／薄汚れたブルジョワジーの利潤に群がり、その分け前を要求しながら、ちっぽけな改良を通じて、より一層合理的な農民支配を望む社会排外主義者の農政活動と対決し、これとの分岐を鮮明にし、鉄塔決戦攻防の組織化の中で、我々の次の戦闘宣言を發しそうではないか。そして、この任務は、全国の労働者人民・農民の自らの勝利をかけた、決してあけ渡すことのならない任務であり、攻防に他ならない。

△△△

全国の革命的労働者人民・農民の皆さん！

既に烽火はあげられた。我々は、三里塚現地において、総力を尽くし、全ゆる手段を持って、鉄塔決戦に向けたうねりを準備している。共に決起し、戦列を打ち固めよ！

この決起は、同時に、激しい社会排外主義、右翼日和見主義との対決を避

けては存在しない。

農政活動を称号する日共・社会党は、

三里塚闘争にとって、阻害物であるばかりか、敵対物である。公然と、日帝

一公団の開港攻撃に屈服し、賛成派—条件派の育成に積極的に手を貸し、権

力の随伴者として、何がなんでも三里

塚闘争を、ブルジョワ民主主義要求—あるいは代替地、土地価格の条件問題—民主的解決へと歪曲し、あるいは

武装蜂起—プロレタリア独裁権力樹立／たる権力奪取のスローガンの下に、噴激する日本農民運動を収束していくことに他ならない。

65年日韓条約、北爆開始の中で、日帝の農業破壊—棄民化攻撃の頂点として打ちおろされた農民からの強制的土

地取り上げに対し、真向うからの闘いを担い抜いてきた三里塚革命的農民大衆の試練の一切は、この政治的に自覚された階級運動の組織化に、誇りをもつて結実させる時を迎えた。

同志諸君／薄汚れたブルジョワジーの利潤に群がり、その分け前を要求しながら、ちっぽけな改良を通じて、より一層合理的な農民支配を望む社会排

外主義者の農政活動と対決し、これとの分岐を鮮明にし、鉄塔決戦攻防の組織化の中で、我々の次の戦闘宣言を發しそうではないか。そして、この任務は、全国の労働者人民・農民の自らの勝利をかけた、決してあけ渡すことの

ならない任務であり、攻防に他ならない。

△△△

全国の革命的労働者人民・農民の皆さん！

既に烽火はあげられた。我々は、三里塚現地において、総力を尽くし、全ゆる手段を持って、鉄塔決戦に向けたうねりを準備している。共に決起し、

戦列を打ち固めよ！

この決起は、同時に、激しい社会排外主義、右翼日和見主義との対決を避

けては存在しない。

既に烽火はあげられた。我々は、三里塚現地において、総力を尽くし、全ゆる手段を持って、鉄塔決戦に向けたうねりを準備している。共に決起し、

戦列を打ち固めよ！

この決起は、同時に、激しい社会排

外主義、右翼日和見主義との対決を避

右翼日和見主義の

社共排外主義政権構想への合流粉碎

民主連合政府の補完物 第四インター「労農政府」論

同志諸君！ 激動する今秋期、我が革命的プロレタリアーの任務は、決定的に重大である。我々は今、この革命的プロレタリアーの隊列を内部から侵蝕し、腐敗させる一切の右翼日和見主義に対する掃討戦を、大胆に宣言し、△武装蜂起—プロレタリア独裁樹立△の勝利の大道を、深紅の國際主義で武装し、切り拓くべく、戦闘を開始しなければならない。

全世界的規模での資本主義から社会主義への現実的移行」。昨4・30ヴェトナム完全勝利へと刻印された國際階級闘争の激動は、ますます、全世界の労働者人民・被抑圧民族の具体的課題にこれの実現をのぼせ、この国際階級闘争の最高の地平は、國際党派闘争として激しい攻防を展開している。

帝国主義者共は、それ故、その刃を、かかる時代を切り拓いてきた主体的力たる民族解

放—社会主義勢力に向け、死活をかけた侵略反革命戦争と戦争挑発行動に、なりふりかまわず突進している。既に「板門店事件」で露わとされたように、帝国主義世界支配の要とするアジア侵略反革命体制の中軸、朴軍事独裁政権を生命線とした日米侵略反革命戦争遂行体制は、本年7・8安保協開催—日米防衛協力委設置を機して、明確に、日米共同軍事行動一日米共同作戦体制による死の行軍に突入した。

帝国主義者共の狙いは、あまりに明らかである。彼らの野望は、唯一点、その延命をかけた、民族解放—社会主義勢力のインドシナからの波瀬の阻止であり、その封殺を通じた再びの国際階級闘争の変質であり、スター社帝への育成がその狙いである。

だが、歴史は二度繰り返さない。そして、我々は断固としてそれを阻止する！

I 革命的プロレタリアーの任務である

今日、社会帝国主義として、この帝国主義者共の「左」足となり、国際階級闘争の激動を沈静せんとする、ソ連共産党をはじめとした東欧共産党、先進国共産党は、このような「戦争と革命の時代」への煮つまりの中で、武装反革命として成長し、全世界のプロレタリア人民の打倒の対象となつた。

一九一七年、歴史上はじめてのプロレタリアートの手による国家権力の掌握は、過渡期世界の開始を宣言すると同時に、帝国主義者的手によって送りこまれた新たなその密約者との対決を課題にした。それは、スターリン主義であり、スターリンは、党を国家機能に、そして、党によるプロレタリアに対する階級闘争指導を国家政策に解消し、同様の手口でもって、レーニン第三インター建設として着手された闘いに反逆し、コミニテルンをロシア国家の防衛と、ロシア国家力量の直接的波及の機関へと解消し、各国の革命闘争を自らの手によって切断し、全世界の社会主义革命から、民族解放闘争を、そして帝国主義心臓部における革命的プロレタリアーの決起を分断し、民族主義—一国主義の下にしばりあげたのである。この敗北は、三〇年代、帝国主義との連合へと国際階級闘争を導き、五〇年代には、

そのことによって延命した帝国主義者と手をたずさえ、明確にその随伴者たる社会帝国主義への転化の道を歩んだのである。

現代過渡期世界、共産主義者、革命的プロレタリア人民は、それ故、帝国主義との闘争を分かちがたく資本主義との闘争・掃討と結びつけるように、同時に、このプロレタリアートによる国家権力の掌握—過渡期世界の開始と共に、帝国主義者の手によって、送り込まれ、育成されてきたスターリン主義—社帝との闘争を、一瞬たりとも曖昧にすることはできないのである。

民族解放—社会主義勢力は、これとの党派闘争を、国際共産主義運動の大分裂にまで高めあげることを通じて成長してきた。第三インター建設の中で闘い取られたコミニテルン2回大会におけるレーニンテーベ、「万国の労働者・被抑圧民族は團結せよ！」を継承し、「世界革命の一環としての民族解放闘争」を掲げ、帝国主義の侵略反革命—新植民地主義支配の攻撃を打ち碎き、帝国主義の戦後支配体制たるヤルタ・ジュネーブ体制を喰い破り、崩壊せしめたのである。

だが、それ故の帝国主義の、最後の時代にふさわしい、侵略反革命戦争遂行の攻撃を前

に、今、帝国主義・社会帝国主義との全面戦争へと向かう、全世界の革命的プロレタリアート、被抑圧民族の国際的武装をめぐつて、民族解放—社会主義勢力内部の路線闘争が激化しており、明確に、この帝国主義・社会帝国主義の本格的打倒への試金石として展開されている。

我が国際主義の旗は、この真只中に打ちたてられなければならない。寸分の躊躇なく、日本プロレタリア人民をこの最前線に組織せよ！ 我々は、帝国主義との闘争を、この国際階級闘争の最高の地平と結びつけ、△世界革命戦争—世界プロ独立△によって現代過渡期世界に結着づけるべく、最後まで闘争し抜かなければならぬ。まさにこれは、将来の問題ではなく、我々が日々そう遇する帝国主義の救済者たる社会排外主義・右翼日和見主義との対決の実践的指針でもある。

現在、この帝国主義の侵略反革命戦争遂行に基く、「次期対潜哨戒機網」の分担配備をめぐる帝国主義者共の密約—「ロッキード疑惑」に端を発した政府危機のさ中に、これら社会排外主義・右翼日和見主義者共は、帝国主義者の命を受けた自らの役割りを、みごとに果さんとしていることを露わとした。

今日、この帝国主義、とりわけ米日帝の朝鮮半島を生命線とした侵略反革命戦争の遂行に対し、帝国主義心臓部におけるプロレタリア人民の実践的任務として、自國帝国主義打倒—帝国主義の侵略反革命を内戦に転化することが、現実的課題にのぼせられている時、この国際主義的任務を投げうったこれらの部分は、もはや公然と闘うプロレタリア人民の内部に毒をまきちらさんと奔走している。

社帝潮流—日本共産党は、そのために、反革命純化の桎梏物を取り払うべく、不破論文一臨時大会において△プロ独立放棄△を完了し、△民主連合政府△の排外主義的完成化を成しきり、首尾一貫したブルジョワジーの同盟者として、その救済を早速強めた。今秋、「ロッキード事件」に端を発した自民党抗争に対し、ブルジョワ政治商人よろしく、プロレタリア人民の噴激を、「汚職糾弾、真相糾明運動」へと歪曲し、ブルジョワジーの救済たる「経済の民主的統制」をかかげた排外主義政権構想—総選挙へと引き入れんとしている。

この日共の大膽なる排外主義者ぶりは、同時に、この純化を補完する別動隊の抬頭を生

みだしておらず、一方の、「武装蜂起主義反対」を掲げ、革命的左翼への白色テロを自己目的化する革マル、他方の、社共の尻押し部隊に革命的左翼の闘いを歪曲せんとする右翼日和見主義、四トロ、プロ青、日向、これらが、我が加納一派の転落先たる「江旗」一派が、日共の従来の座に滑りこまんとするのと同様、ここぞとばかり、その手腕をふるわんとしているのである。

とりわけ、右翼日和見主義の頭目たる四トロは、「社共は労農政府を樹立せよ！」と、社共排外主義政権構想との合流を宣言すると共に、プロレタリア人民に対しても、そのために「自民党政打倒の労働者統一戦線を建設せよ」と手際よく、この尻押し闘争の穴埋めを行い、実際には、今春期闘争の如く、6・20の市民主義者との連合に、プロ人民の政治的決起を抑えこんでいくのである。

この随伴者、日向一派は、威勢よく、「帝国主義の侵略反革命を、蜂起—内戦—世界革命戦争へ」をぶちあげ、「全党全軍（？）」の総力決起」を主張する。彼らの野望は、一見革命的なスローガンでプロ人民をだまくらかし、その実、「共産主義者の革命戦争の行動と思想の獲得」にも見られる如く、帝国主義の侵略反革命との闘争を、啓モウ運動—認識運動に歪曲し、骨抜きにするための毒物に他ならない。帝国主義の朝鮮侵略反革命との対決を、6・20市民主義者との共闘として行う事に、何の矛盾も生みださないのも、もつともなことである。

これら右翼日和見主義は、今日、共通に官公労を主軸とする労働組合運動に基礎を置き、日共に対する反対派としてその位置を形成しながらも、その基礎において、社会排外主義と同一の代物である。それが、革マルの如く武装反革命として登場するか、あるいは、四トロ等の右翼日和見主義として、プロ人民の隊列に潜入し続けんとするかは本質的な事柄ではなく、それらは徹頭徹尾、帝国主義の侵略反革命の中で生みだされる、社会排外主義の種々様々に変化する補完物に他ならない。

帝国主義者は、政府危機の中で、大合唱するこれら社会排外主義、右翼日和見主義を、あざ笑うかのように、その野望を露わにした。「自民党に少々ガタがきて、労使関係が安定し、警察・検察・裁判所・官僚組織が健全なら、この危機は乗り切れる」と、日経連桜田が言い放ったように、日帝—国家権力は、政府危機をものともせず、増え強権的に官僚的警察的独裁支配を要に、侵略反革命戦争にひた走ることを宣言したのである。

同志諸君！

もはや一刻の裕余も許されない。米日帝は日米共同軍事行動の機能を打ち固めつつ、戦争と戦争挑発を繰り広げ、日帝は、南朝鮮新植民地主義支配を強めながら、国防會議開催

を掲げ、革命的左翼への白色テロを自己目的化する革マル、他方の、社共の尻押し部隊に革命的左翼の闘いを歪曲せんとする右翼日和見主義、四トロ、プロ青、日向、これらが、我が加納一派の転落先たる「江旗」一派が、日共の従来の座に滑りこまんとするのと同様、ここぞとばかり、その手腕をふるわんとしているのである。

とりわけ、右翼日和見主義の頭目たる四トロは、「社共は労農政府を樹立せよ！」と、社共排外主義政権構想との合流を宣言すると共に、プロレタリア人民に対しても、そのために「自民党政打倒の労働者統一戦線を建設せよ」と手際よく、この尻押し闘争の穴埋めを行い、実際には、今春期闘争の如く、6・20の市民主義者との連合に、プロ人民の政治的決起を抑えこんでいくのである。

この随伴者、日向一派は、威勢よく、「帝国主義の侵略反革命を、蜂起—内戦—世界革命戦争へ」をぶちあげ、「全党全軍（？）」の総力決起」を主張する。彼らの野望は、一見革命的なスローガンでプロ人民をだまくらかし、その実、「共産主義者の革命戦争の行動と思想の獲得」にも見られる如く、帝国主義の侵略反革命との闘争を、啓モウ運動—認識運動に歪曲し、骨抜きにするための毒物に他ならない。帝國主義の朝鮮侵略反革命との対決を、6・20市民主義者との共闘として行う事に、何の矛盾も生みださないのも、もつともなことである。

これら右翼日和見主義は、今日、共通に官公労を主軸とする労働組合運動に基礎を置き、日共に対する反対派としてその位置を形成しながらも、その基礎において、社会排外主義と同一の代物である。それが、革マルの如く武装反革命として登場するか、あるいは、四トロ等の右翼日和見主義として、プロ人民の隊列に潜入し続けんとするかは本質的な事柄ではなく、それらは徹頭徹尾、帝国主義の侵略反革命の中で生みだされる、社会排外主義の種々様々に変化する補完物に他ならない。

帝国主義者は、政府危機の中で、大合唱するこれら社会排外主義、右翼日和見主義を、あざ笑うかのように、その野望を露わにした。「自民党に少々ガタがきて、労使関係が安定し、警察・検察・裁判所・官僚組織が健全なら、この危機は乗り切れる」と、日経連桜田が言い放ったように、日帝—国家権力は、政府危機をものともせず、増え強権的に官僚的警察的独裁支配を要に、侵略反革命戦争にひた走ることを宣言したのである。

同志諸君！

もはや一刻の裕余も許されない。米日帝は日米共同軍事行動の機能を打ち固めつつ、戦争と戦争挑発を繰り広げ、日帝は、南朝鮮新植民地主義支配を強めながら、国防會議開催

に見られる軍事力の飛躍的強化によって、朝鮮侵略反革命戦争の担い手として、その行動を開始せんとしている。

暗躍する社会帝国主義は、民族解放闘争や革命運動は、帝国主義の戦争策動と何ら変わることのない「世界戦争の火種」であると公然と宣言し、のみならず、帝国主義の戦争挑発行動に終止沈黙することによって、帝国主義を擁護するためにのみ、それらの言葉があることを宣言した。

朝鮮半島をめぐるこれらの攻防に対し、我々は、はつきりと民族解放—社会主義勢力の前進と結合し、日帝の朝鮮侵略反革命戦争を内戦に転化することを、日本プロレタリア人民の国際主義的任務に据え、激動する朝鮮社会主義革命への、実践的・能動的連帯を生きたものとして闘い取らなければならない。

「帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争—世界プロ独を組織する世界単一党を、国際階級闘争の最前線に打ちたてよ！」

「民族解放—社会主義勢力の前進と結合し、日帝の侵略反革命を内戦に転化せよ！」

「革命的労働者人民は共産主義者同盟全国委員会に結集し、プロレタリアートの武装蜂

起—プロレタリア独裁を組織する中央集権非合法党を戦取せよ！」

これら我々のスローガンは、現代過渡期世界における任務を遂行するための、決してやることのできない基準である。

そして、この下に、この実現のために、今秋期闘争を闘い抜くにあたって、我々と革命的プロレタリア人民が、階級闘争深部に巣喰う右翼日和見主義との闘争を組織し、帝・社帝との全面戦争たるへ武装蜂起—プロ独の大道を掃き清めることは、決定的に重要である。我々は、彼らの発生の根柢とその本性を引きづり出し、これとの闘争を全国政治闘争のみならず、ありとあらゆる諸戦線、労働運動内部から一掃し尽さなければならない。口先きだけで革命的スローガンを認めるふりをする一切の輩の仮面をひっぺがし、革命的路線と実践を実現する唯一の主体たる中央集権非合法党建設へ邁進せよ！

同志諸君！今秋期、右翼日和見主義との闘争は、社共排外主義政権構想との対決と並んで、革命的プロレタリア人民にとって、避け難い一つの大きな任務であることを、確認しようではないか！

民・主・連・合・政・府・を・前・提・と・す・る



今秋～来春に至る過程での、右翼日和見主義者共の、政府危機をめぐって動めく衆議院選挙・参議院選挙の過程における、社共排外主義政権構想への屈服は、もはやすさまじいばかりの勢いで進行することは明らかである。彼らの急進主義批判に名を借りた、朝鮮侵略反革命、その要たる官僚的警察的独裁支配に対する革命的プロ人民への敵対は不可避であり、我々は断固として、隊列内部に忍びこみ、社会排外主義、社会帝国主義への屈服の道を切り拓かんとするこの右翼日和見主義との党派闘争を、勝利的に切り拓かなければならぬ。

右翼日和見主義の実体勢力をなす四トロは、今春以降、△当面する政治情勢の展望と労働者階級の任務▽（「世界革命」四一七号）において、「ロッキード糾弾、生活防衛、資本家政府打倒の労働者統一戦線に基く労働者・農民の政府を樹立せよ」を主張し、最近にあつては、「社共の議会主義への歪曲」に対し、自民党政打倒の実力闘争」を主張している。

現在の四トロの主張の背景となつてゐる、この四一七号を頂点とする一連の提起こそ、四トロの社共への全面的屈服ぶりと、その補完物への転落の姿を露わにするものに他ならない。

彼等は言う。「ロッキード事件をもつて政

府危機に突入したにもかかわらず——すなわち、労働者階級の側が、ほんの一撃さえ加えさえすれば、三木資本家政府が打倒されるという、巨大な労働者階級の実力闘争の可能性ばかりの勢いで進行することは明らかである。彼らの急進主義批判に名を借りた、朝鮮侵略反革命、その要たる官僚的警察的独裁支配に対する革命的プロ人民への敵対は不可避であり、我々は断固として、隊列内部に忍びこみ、社会排外主義、社会帝国主義への屈服の道を切り拓かんとするこの右翼日和見主義との党派闘争を、勝利的に切り拓かなければならぬ。

右翼日和見主義の実体勢力をなす四トロは、今春以降、△当面する政治情勢の展望と労働者階級の任務▽（「世界革命」四一七号）において、「ロッキード糾弾、生活防衛、資本家政府打倒の労働者統一戦線に基く労働者・農民の政府を樹立せよ」を主張し、最近にあつては、「社共の議会主義への歪曲」に対し、自民党政打倒の実力闘争」を主張している。

これだけでも、四トロの野望は明らかであり、右翼日和見主義としての任務は鮮明である。百歩譲って、「大資本の収奪・無償・・・・・の政府」を実現するについても、それは、明確に、プロ独権力の樹立を通して一連の社会主義政策として執行されるのであり、これは、日本帝国主義の武装蜂起による打倒抜きには存在しない。彼らの言う政府とは、しかも、今日激しく闘われている△プロ

起—プロレタリア独裁を組織する中央集権非合法党を戦取せよ！」

これら我々のスローガンは、現代過渡期世界における任務を遂行するための、決してやることのできない基準である。

そして、この下に、この実現のために、今秋期闘争を闘い抜くにあたって、我々と革命的プロレタリア人民が、階級闘争深部に巣喰う右翼日和見主義との闘争を組織し、帝・社帝との全面戦争たるへ武装蜂起—プロ独の大道を掃き清めることは、決定的に重要である。我々は、彼らの発生の根柢とその本性を引きづり出し、これとの闘争を全国政治闘争のみならず、ありとあらゆる諸戦線、労働運動内部から一掃し尽さなければならない。口先きだけで革命的スローガンを認めるふりをする一切の輩の仮面をひっぺがし、革命的路線と実践を実現する唯一の主体たる中央集権非合法党建設へ邁進せよ！

同志諸君！今秋期、右翼日和見主義との闘争は、社共排外主義政権構想との対決と並んで、革命的プロレタリア人民にとって、避け難い一つの大きな任務であることを、確認しようではないか！

越」した死んだ夢想であり、彼らがもつともらしくこれを吹聴するのは、唯一、朝鮮侵略反革命戦争遂行の下で、政治的決起を深める。彼らは立派なことに、この帝国主義の最後の時代に、ブルジョワ国家権力機構を打倒することなく、社会主義に向けた経済的変革をなし得るという命題をあみだし、帝国主義の侵略反革命戦争の救済に奔走しているのだ。

そして同時に、これは日本共産党的反革命的純化の隠ペイをも目論むものである。された帝国主義国家権力の贊美によつて、これを作成しきるのである。

今日、国際階級闘争の最高の地平が明らかにしているように、△プロ独期▽とは、共産主義の現実に向けた△収奪者の収奪▽としての激しい階級闘争の一時代であり、それは、帝・社帝の世界史的打倒と、ブルジョワジー・スターリン主義の掃討戦たる全面戦争の時代である。そして同時に、世界單一党建設へと収斂される一党独裁の下に、はじめてこの任務を実現するものである。

このマルクス・レーニン主義の実践テーゼに公然と反逆し、本年13回大会において、プロ独を超階級的なプロレタリアートの政治権力へと陥しこめた日共ですら、社会主義的政策は、民主連合政府樹立以降の△執行権力▽の掌握と、その力による革命政府の樹立なくして実現できないとしているのである。日共の、かかる國家権力機構の把握は、彼らのプロ独歪曲の必然的產物たる、議会で多数を握ることによって、できあいの国家機構を利

用できるという前提に立っているとはいえ、四トロ諸君は、それすら吹つとばし、まことにはあどけなく、官僚的警察的独裁支配としてある帝国主義国家機構にふれることなく、労農政府を実現すると主張するのである。両者がいかに本質的に同一であり、日帝の朝鮮侵略反革命戦争を内戦へと転化せんとする革命的プロ人民の國際主義的闘争への敵対であるかは、一目瞭然だろう。

ただただ、四トロの諸君が、この日共に對して不満なのは、「社共の既成指導部」が、この△大道△のために△小異△を捨てるのに対しても、その△小異△を大衆運動の自主的闘争△の見地から批判しているだけなのである。彼らの日共一議会主義批判とは、その程度のものであり、彼らの実力闘争とは、帝国主義を打倒するなどもつてのほか、圧力をかけんがためのものであり、日共の院内闘争と院外闘争の結合とさして変わらぬものである。

既に彼らは、「社共統一戦線に對して、我々は、一切の革命的戦闘的潮流、党派の排除の企みを粉碎しなければならないし、革命派の公然たる宣伝・扇動の自由を要求しなければならないし、プロレタリア民主主義の確立

3

四トロの階級的労働運動に

対する敵対

四トロの言う労農政府が、実は、民主連合政府の樹立を前提としていることを確認した上で、更に、彼らの労働者統一戦線なるものが、民同労働運動反対派の結集でしかないことを、次に暴露していこう。

「社会党・共産党・民同官僚の意識的な裏切りに対しても、教訓化されなければならないのは、帝国主義の衰退期において、労働組合は、旧来のような位置を保持できず、革命的闘争の道か、それとも、ブルジョワ国家への寄生の道かの二者択一が問われるが、今日、我々は後者の道を進んでいる。だが、その移行にあたっては、労働組合の官僚主義的な政治的再組織化の過程が伴う。76春闘は、その政治的再組織化の着手のはじまりとしてあり、第一の手口は、△ストライキ▽の△ネトライキ▽への歪曲に見られる自主的、自發的闘争の抑圧、第二には、先進的部分のレッドページである」と。筆舌に尽くしがたい主張である。

このことから、まづもって明らかにされなければならぬのは、彼らが指定している労働者階級とは、民同に組織された労働組合運動たることである。そして、四トロは、この民同指導下の労働組合運動をその基礎として、民同指導部、社会党と政治を競っているのであり、これが、当面する労農政府樹立に向けた労働者統一戦線の実体的基礎である。

国家権力の暴力的打倒—帝国主義の侵略反革命を内戦に転化する事業は、自然発生性の外に組織を形成し、△計画された武装蜂起△によってのみ存在する。

それに敵対する彼らの労働者統一戦線は、それ故、民同労働運動と何ら矛盾せず、むしろ不可避の前提なのである。この民同労働組合運動を日本革命の主体的基礎（しかも彼らは、この日本革命すら極東解放革命の主力軍△日本プロの労働組合に解消する度しがたい反革命的立場なのだが）といいくるめる主張は、もはや、四トロが、いかなる意味

を要求して闘わなければならない』（四三三号）として、民主連合政府に向けた社共統一戦線の末席を汚すことを、公然と宣言した。

このような四トロの首尾一貫した尻押し路線は、彼らの「労働者階級は、一切のものから自由でなければならず、手を縛られてはならない。（労働者階級は権力を握るな）」という立場から來ている。まことに自由主義

を要求して闘わなければならない』（四三三号）として、民主連合政府に向けた社共統一戦線の末席を汚すことを、公然と宣言した。

おいて彼らは、民主連合政府への反対派ではなくして、その賛同者であり、社共が組織化できない部分を、排外主義政権構想の下へ組織する社帝、社会排外主義の補完物として、その合流を宣言したのである。

ブルジョワジーに受け入れやすい、たいした「永続革命論」ぶりである。

もはや彼らの本質は明らかである。ここに

革命派の労働運動指導は、春闘路線による労働者階級の中労委（チームブルを囲んでの取り決め）による取約の方式、階級的政治的決起を未然に防ぐ安全弁としての組合主義的政治闘争と議会主義への取約という手口を駆使する、帝国主義の巨大な超過利潤の一片で買収される労働貴族との闘争を不可避としていた。

そして、そのことぬきに、帝国主義足下の労働運動を、その自然発生性から解き放ち、社会主義革命の部隊へと形成することはできなかつた。

これは、革命的左翼の60年代から、今日に到る実践のうちに、首尾一環して証明されて

いる。60年代から現在に到るまでの革命的左翼の自國帝国主義打倒の闘いは、決して民同労働組合運動を基礎にして、その急進化の上に存在していたわけではない。

何よりも日本プロと第二次ブントは、七回大会以降、当時の限界の中でとはいえ、現代過渡期世界を「戦争と革命の時代」として正しく把握し、以って日本プロの階級的任務として、「社会主義革命の前夜としての帝国主義—帝国主義の侵略反革命を内戦へ転化せよ」の大道を取るか否かの根本的闘争を、同盟内（叛旗・情況）にあって開始した。提起された階級的労働運動は、従来の自らの路線が、「民同労働組合運動内の左翼反対派、左翼補完物」であった事を総括し、「逆手論」的枠内から日本プロの政治的決起を解き放ち、ゼネスト革命論、ソビエト主義と自己を区別して来た。

第二次ブントはこの闘いの基礎の上に、それが以降の帝国主義の侵略反革命との闘争を、労働組合運動に基礎をおく反戦闘争ではなく、日本労働運動を蜂起—プロ独立共産主義の日本プロの総路線への党による目的意識的けん引と不可分に結合することによって、69年に煮つまる安保粉砕・日帝打倒に向けた一大政治高揚を準備し、日本プロの國際主義を鮮明としてきた。

それは我々を筆頭とする革命的左翼にあっては工場プロの反戦青年委への組織化、産別反戦の地区反戦への組織化としてあつたのである。何よりも、階級的労働運動は帝国主義打倒に向けた闘争として、社共の労働運動の

議会主義的歪曲からの全面的分岐の上に、蜂起一プロ独立・共産主義を担う唯一の階級へと自らの任務を設定し、革命運動へと自らを發展させ、革命党と結合して来たのである。60年代において、この様な問題を一切解決することなく、60年代末期におけるベトナム反戦を契機とした安保粉碎一日帝打倒の闘いを決して担うことなく、労働組合内反対派として、民同労働組合運動内部で民同の裏切りを暴露する事をもって、自己満足していた四トロは、それ故に、革命的左翼の闘いの後をヨチヨチとついて歩いただけだったのであり、唯の一度も、その最先頭にたつことはなかった。それ故に、彼らは社共との関係で存在を維持する範囲の中ではこの闘争を支持したが、この闘いがその基礎を打ち碎く点においては反対した。だから、中電マッセンストにおける彼らの敵対もまた当然の事であった。

現在、前述した様に、四トロの諸君も「労働組合のブルジョア国家への寄生の道」として遅まきながらも、労働組合運動そのものの限界を自覚したかに見えるが、だが、またもや「その移行には、政治的再組織化の過程が伴う」として、労働者階級の危機の時代における政治的決起を労働組合運動へと封じこめるのである。そして、彼らの唯一の核心たる「決して労働組合官僚に対する単純な反発から、かつての新左翼主義の誤まりを犯してはならない」と、再主張するのである。だが、これだけでは社会排斥主義の補完物たるに充分ではない。彼らは「今日の情勢の深さとは、労働者階級が一度実力闘争の道にたち上がる

この様な彼らの労働運動に対する誤った把握は、帝国主義足下における労働組合運動の排除主義的性格、およびその側面に対する全面的屈服にその根拠がある。彼らは、前述した引用においても明らかな様に、労働組合運動の直接延長上、そしてその基礎の上に帝國主義を打倒しうると考える本質的誤まりを前提としている。

この事が、典型的な経済主義・右翼日和見主義の手口であり、やり方であることは、レーニンがもののみごとに暴露している。少し長くなるが引用しておこう。「……自然発生性を云々する人がいる。しかし労働運動の自然発生的な発展は、まさに運動をブルジョアイデオロギーに従属させる方向に進み、他な合主義であるが、組合主義とは、まさしく、ブルジョアジーによる労働者の思想的奴隸化を意味するからである。だから、我々の任務をなすわち、社会民主主義者の任務は、自然発

4

労働組合把握の誤まり

と、たちまちのうちに権力のための闘争へと発展し、革命という結論にまでたどりついてしまうという今日の情勢がもつてゐる危機の深さ」などと敗北主義的主張をなし、だから自分たちは、それに全面的に答えることができないから、社共統一戦線内部で党派闘争しようと主張し、革命的左翼の69年から71年に到る「武装蜂起とプロ独立を組織する中央集権非合法党建設」の血の実践に全面的に敵対するのである。彼らは帝国主義の危機がにつまり、権力問題に直面すればするほど、「蜂起と非合法党建設」に対する敗北主義は、そして、彼ら自身がそうであると自覚すれば自覚する程、彼らにとっては社共統一戦線と民主連合政府はなくてはならないものなのである。

もはや、以上の事から明らかなるに、四トロは帝国主義の危機の時代の中での排外主義社会排斥主義の抑圧の中に既成労働組合運動のくびきを断つて決起した革命的労働者に対しても、労働組合運動へ引きもどし、社共統一戦線の下で闘えと言ふ一個二重の抑圧者としてたちあらわれるるのである。76春闘において「再組織化」が開始されたなどとは全くのデタラメであり、69~71年に到る武装闘争に決起した革命的労働者に対する社共、権力一体となつたすぎまじいレッドページを隠蔽し、社共を擁護するのだ。四トロの諸君は、現在、その様な政治的決起そのものが社共民主官僚のページの口実になるとネコなで声で説教するのであり、ここに彼らの首尾一貫した社会排斥主義への屈服ぶりと、その手先としての本質が鮮明なものとなる。

同時に、この様な彼らの労働組合運動に対する把握は、メンシェビキとの組織問題をめぐる分裂において調停者として現われたトロツキーの致命的弱点を受け継いでいるのである。すなわちトロツキーは前述においても述べられている様に、レーニンの階級の最高の團結は党である事、かくして党の任務はプロレタリア階級を共産主義の建設にまで指導することとして設定したのに対し、トロツキーは、最高の團結の質はソビエトであるとし、党の任務をそのソビエトの指導であると考えていたのである。この様なトロツキーの立場は、プロ独を一方では党の独裁であると把握しえず、自然発生的大衆組織の最も高揚したものである「ソビエト」の独裁であると見ることによつて、権力を奪い取られて、増え死に復活をもくろむ種々のブルジョア的傾向と闘う事もできないものとなつていかざるを得ない。今日、四トロはこのトロツキーの致命的弱点を継承してしまつてゐるのである。

結局の所、四トロの主張している事は、あるがままの資本主義社会の生活が不可避的に生み出すプロレタリアートに依拠し、プロレタリアートが資本主義的実生活から不可避的に学ぶ資本主義批判と、プロレタリアートの自然発生的な経済闘争が不可避的に形成する社会主義的な意識が革命を起こすのを、唯々共産主義者は援助するのであり、そのためには組織を持つのであるという事である。

この様な彼らの実践が、労働組合活動一にして、厳密には決して労働運動でなく、決定的存在をふまえる事によって、それ自体としては、労働者の自然発生的な要求を基礎とした労働組合がはじめて、革命の学校の性格と役割ができるのである。その意味では、労働組合とは革命の学校ではあっても、その主体ではありませんのである。以上

これが全面的に帝国主義労働運動指導部の全的掌握の下にあるうとも)活動する事を決して否定するのではなく、むしろそこでの排外主義指導部との首尾一貫した闘争を実現し、勝利するためこそ、その組合的團結(意識と組織)を当面する革命の路線と組織のとは考えないだけである。

右翼日和見主義は、このレーニンの教えを社会民主主義の意識を外部から持ち込み、それを労働組合員に認識させると把握し、労働組合運動に学習会サークルを継ぎたすか、あるいは政治情勢を一般的に、図式的に説明するかに自らの任務を切り縮め、党を結局の所、労働組合運動の指導部、フラクションに切り縮めるのである。そして、共産主義者の任務を、何よりも日本プロレタリアートの死命を決する中央集権非合法党建設を、現段階社会排斥主義の抑圧の中に既成労働組合運動のくびきを断つて決起した革命的労働者に対する、労働組合運動へ引きもどし、社共統一戦線の下で闘えと言ふ一個二重の抑圧者としてたちあらわれるのである。76春闘において「再組織化」が開始されたなどとは全くのデタラメであり、69~71年に到る武装闘争に決起した革命的労働者に対する社共、権力一体となつたすぎまじいレッドページを隠蔽し、社共を擁護するのだ。四トロの諸君は、現在、その様な政治的決起そのものが社共民主官僚のページの口実になるとネコなで声で説教するのであり、ここに彼らの首尾一貫した社会排斥主義への屈服ぶりと、その手先としての本質が鮮明なものとなる。

5

組織化の一切に敵対するのも不可避の事である。「社会民主主義者の信念は、労働組合の書記であつてはならず、人民の『保護者』でなければならぬ。労働者階級の労働組合政策

更に、我々が明らかにしておかねばならないのは、彼らが綱領的主張と自負してやまない極東解放革命論の本質が、実のところは日本共の帝国主義本国プロの排外主義的利益にアジア人民の闘いを従属させる反米帝統一戦線のヘタクソな亜流版である事についてである。それに基づいて彼らの政治闘争は、それ自身としては決して帝国主義打倒を呼びかけることはなく、結局の所は、帝国主義の政策の暴露であり、今日社共がその社会排外主義への全面的転落の中で、主張しえない部分を補完しているにすぎないのである。何故なら、四トロにとつても、一切の闘いは「社共は労農政府を樹立せよ！」の中に集約されるからである。同時に彼らの極東解放革命は言葉だけはいさましいが、以上述べて来た様な四トロの本質とは何の矛盾を示すものではない。彼らが自負してやまないこの極東解放革命論は、おおよそ現在の国際共産主義運動の分裂に対して何の役にもたたないばかりか一國主義であり、本質的には先述した様な排外主義連合政権構想への屈服をより一層促進させるしろものである。

「現代世界を、米帝を筆頭とする帝国主義世界権力体系と、一方における労働者国家群植民地革命を一方の世界権力極として、世界的二重権力関係としてとらえ、一方の世界権力極に依拠すること（帝国主義との関係における労働者国家群と植民地革命の無条件的擁護）によって、アメリカ合衆国を国際的主導軸とする帝国主義世界権力体系の永久的解体と最終的な絶滅、すなわち世界革命の復合的な全過程を完成させる」ということ」（綱領のための闘争、インターナショナルのための闘争」が、「永久的な反帝国主義世界革命」の基本的内容なのである。要するに、世界革命は米帝打倒を以って完成するという驚くべき主張である。そして從来までの「植民地国家における植民地革命、帝国主義諸国との関係タリア革命及び労働者国家における政治革命という從来の三つのセクターの中間主義」（同上）を、基本的に帝国主義との闘争において統一したという主張であり、一切は米帝と闘うか否かであり、民族解放闘争も、帝国主義本国における闘いも、反帝（米帝）との関係において唯一革命的であるとする主張なのである。

この全くの陳腐な「永久的な反帝国主義世

は、労働者階級にとってのブルジョア政策である」というレーニンの経済主義者、合法マルクス主義者に対する闘争の結論は、我々に再度確認されなければならない。

四トロ極東解放革命の排外主義的本質

「界革命」は、いみじくも四トロが帝国主義の首尾一貫した打倒は、資本主義の打倒と結びつかなければならない事を、全く理解しておらず、「帝国主義は資本主義の上にたつ上部構造である」というレーニンのテーゼに対し反対したブハーリンと同様の立場に——當時トロツキーがそうであった——に立っていることをしめしている。

彼らの帝国主義との闘争の内実は、それ故、「帝国主義世界権力体系」ということばにも明らかなように、帝国主義の全世界的な政策体系に対する闘争にきりちぢめられる資本主義の擁護とその贅美の立場を本質としている。この立場は、プロ独下の階級闘争の否定に、すなわち、プロ独期が依然として残存する小生産とそれを基礎とした資本主義とブルジョアジーの復活の可能性が存在する激しい階級闘争の時代であることを否定するばかりか、

四トロは、帝国主義に反発する小ブルジョアの代弁者であることが、ここでも暴露されるとともに、彼らが、まったくの小ブル民主主義派に他ならないことを自己宣言してしまうのである。そして何よりも、彼らは、スターリン主義が、このようなプロ独期における資本主義的要素に依拠し、スターリンの一連の政策（党の国家機構への解体、社会主義に向けた党の階級闘争指導の国家による指導への代置など）を背景として発生してきたことを全然、理解していないのである。（この反動的帰結に関しては後述）

右翼日和見主義の革マル主義への水先案内人たるわが加納一派の「だから資本主義批判が大切だ」という主張は、帝国主義の打倒ぬきに、今すぐ資本主義の打倒をよびかけ、現に存在する帝国主義国家権力機構にまったく手をかけず、帝国主義打倒の闘争に対しても、「テロリズム・急進主義」とバトウする点において、四トロとの何の本質上のちがいはない。

さらに、四トロの反帝とは、反米帝に限定されている点についてである。すなわち、帝国主義は「帝国主義の世界綱領」を有し（帝国主義を政策の体系として把握することから）、
おいて、四トロとの何の本質上のちがいはない。

右翼日和見主義の革マル主義への水先案内人たるわが加納一派の「だから資本主義批判が大切だ」という主張は、帝国主義の打倒ぬきに、今すぐ資本主義の打倒をよびかけ、現に存在する帝国主義国家権力機構にまったく手をかけず、帝国主義打倒の闘争に対しても、「テロリズム・急進主義」とバトウする点において、四トロとの何の本質上のちがいはない。

さらに、四トロの反帝とは、反米帝に限定されている点についてである。すなわち、帝国主義は「帝国主義の世界綱領」を有し（帝国主義を政策の体系として把握することから）、おいて、四トロとの何の本質上のちがいはない。

また、四トロが、主觀的には、継承しようとしている、17年ロシア革命成立以後、すぐさまの革命戦争を主張した左翼反対派的急進主義として、四トロみずからがたちあらわれることもまた帝国主義足下の労働組合運動を絶対の基礎としているが故に決してないのである。

だがあとにもべるが、四トロは、中国共产党に對してだけは、左翼反対派の戰術を強要するのである。

以上の様な四トロの立場は、戦後ヤルタ・ジュネーブ体制崩壊の主体的要因となつた、民族解放—社会主義の闘いに對して、全くの政治力学にもとづく米帝との関係だけでしか把握しないのである。

彼らは、なによりも、この民族解放—社会主義の闘いが、帝国主義の時代でありながら全世界的なプロ独への移行の時代という現代過渡期世界の基本的特色を、ヤルタ・ジュネーブ体制の封殺を打碎く事によつて指ししめすとともに、スターリンの社帝への転化に抗し、國際共産主義運動の大分裂の革命的翼を形成したのである。

「中ソは、共同してベトナム人民を支援せよ」のスローガンに明らかに、四トロは國際共産主義運動の大分裂に對して「帝国主義を利するもの」なる社帝の立場にたつている。

四トロは、革命ベトナムに對して、「アジア社会主義合衆国を合同経済とソビエト連邦によつて展望する」ことを革命の原則にせよと要求するのである。

そして、ベトナムにおける社会主義建設を工業化問題のみにきりちぢめた上で、これを保障するのは、中ソとの合同計画経済の展望と更には、米日の発達した経済力であると主張する。

そして、日本プロはこの高度に発達した生産力（これはすさまじい、日帝の高度に発達した生産力は、全世界的な米帝を筆頭とする

帝国主義の被抑圧民族に対する搾取と収奪へと結びつき、更には、アジアなかんづく南朝鮮に対する侵略反革命と新植民地主義支配に基づいて存在するのだ！」を統制する主人公（だから四トロにとつては、帝国主義を打倒する事は都合の悪い事だったのだ！）になつてアジア合衆国（こうなると大東亜共栄圏ではないのか！）と合流するのだそうだ。こんな事は、帝国主義か社会帝国主義でない限り不可能だ。

たしかに、この主張は、ブレジネフの泣いて喜ぶ国際分業—帝国主義との暴力的闘争ではなく社会主義陣営をおいつめよう。そのためにはソ連経済の下に、各経済は全面的に従属しよう—全く同様ではないか。

ここに到つて、四トロが、国際共産主義運動の大分裂において、社帝の立場にたつている事は、ますます鮮明というものである。

アジアにおける米帝との闘争は、社帝との闘争を不可避とするし、それは民族解放・社会主義との結合ぬきにはありえない事、これが決定的条件なのだ。それは、四トロの如く一般的な式を描き、その主体を、中国プロレタリアートだとか、中国農民、ベトナム農民だとかに設定することではない。

問題なのは、これらの党派との「世界党建設」に向けた、プロ独をめぐる国際党派闘争」なのであり、我々にあつては、「帝国主義の侵略反革命・社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争—世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ」というスローガンの下への統合なのである。

このような立場から主張される極東解放革命（この中に日本革命もふくまれる）の主要な内容は、米日韓東帝國主義体制打倒とされる。

そして、この日米の軍事経済主義体制に対する、根本的対抗軸が、中国であり、労働者国家であるという政治力学がまたもやもぢだされる。

ここからもたらされる実践的帰結は、「日帝の侵略反革命を内戦に転化する」という自己帝国主義打倒の立場が、全く捨象されるが故に、常に、この帝国主義体制に対する根本的対抗軸たる、中共に対する裏ぎり批判に、

更には、中共を筆頭とする社会主義国の人民は日帝との闘争のために、自國官僚打倒をやれという排外主義的批判へと転落するのである。

この立場から主張される「日帝は極東人民の共通の敵である」は、決して自らは日帝打倒の武装蜂起を担わず、日帝との一切の闘争をアジア人民の肩に背おわすものである。

さて、以上あきらかにしてきたように、「永

久的な反帝世界革命に基づく極東解放革命」

は、「社共は、労農政府を樹立せよ」なる彼の実践に全く役に立つものであることが明らかなことだ。

府を樹立したらすぐ「大資本の収奪・無償国

有化・労働者管理」を実現しなさい。国家権力機構は、アジア人民が粉碎してくれます

かのようにか。「社共の諸君、民主連合政

府構想たる社共の路線の根本的承認に結びついている点において、どれもこれも同質である。

6

朝鮮侵略反革命粉碎闘争から 逃亡する右翼日和見主義

右翼日和見主義諸派は、結局のところ彼らがいくら口先では否定しようとも、中間連合政府構想たる社共の路線の根本的承認に結びついている点において、どれもこれも同質である。

そして彼らの組織路線とは、彼らがいかにとりつくろおうとも「左翼反対派労働組合路線」と、党の武装と蜂起の計画的組織化ぬきの「平和ソビエト」路線の混合、あるいは、

その時々の別の言いたてにすぎないのである。

彼らの主観的な思想はこうである。『中間連合政府路線を大道とし、この中で自分たちは、左派反対派でありつづけるという小異を

とろう。そうすればいっかは、社会主義にいたるだろう。社会主義とはプロレタリア大衆の事業だ。（そうだ。プロレタリアートの、もしもあり得るなら自然的成长のお気にめすま

まに！）……おそらくたぶん社会主義にむかうだろう。その列車の運転席には誰がすわるのか。社共—連合政府だ。（しかし彼らはおそれない）だから、連合政府構想内に労働者統一戦線（ソビエト）が「ゼネスト」をもって社共の尻をたたくのだ。』

「ゼネスト」—これが彼らにとって唯一の「計画された」日本革命の「戦術」なのである。このようにして彼らは、帝国主義がプロレタリアートの武装蜂起によって打倒されなければならないという点を全面的に否定するのである。

今秋期、右翼日和見主義は、このような四トロの路線を「資本主義批判」でおぎなつたり（加納一派）、あるいは「帝国主義の侵略

反革命を峰起・内戦へ」とし、「革命戦争の思想と行動」の獲得として、この統一戦線に「武装の思想」をつぎたす日向などに補完されながら「社共は労農政府を樹立せよ！」のスローガンのもと「なぜ社共はこの時期大衆行動ぬきに証人喚問要求だけくりかえすのか」という社共の尻押し闘争へと転落することは確実である。

それ故、今秋、四トロを筆頭とする右翼日和見主義の実践のすべては、全労活をはじめとする民同反対派運動の全国統一戦線への再編（社共統一戦線の尻押しとして）を一切の実践の収約とするだろう。

彼らは、今秋から来春にかけた衆議院選、参議院選をめぐる「選挙闘争」の過程において、必ずその反動の一翼をになうであろうことも必然のこととして準備されている。

すべての革命的プロレタリアート人民諸君！ 我々は日帝の朝鮮侵略反革命の激化の中で進行する、右翼日和見主義の社共排外主義政権構想への大合流を粉碎しなければならない。このたたかいは、朝鮮侵略反革命との対決を国際主義的責務にかけて実現せんとする革命的プロレタリアートの重大な任務である。

日帝の朝鮮侵略反革命を内戦に転化せよ！ 武装蜂起—プロ独を組織する中央集権非合法党建設の事業に結集し、ともにたたかわん！

天皇制とたたかうすべての人々の必読書

■75・7・17 姫百合・白銀公判闘争勝利！ 関西「支持する会」パンフ

■ひめゆりの炎（創刊号）

¥100

取扱中！

■姫百合・白銀公判闘争勝利！ 関西「支持する会」パンフ

¥100

■ひめゆりの炎（創刊号）

¥100

進化の歴史(後編)(第4回)

正義 \rightarrow 不正 \rightarrow 正義

（社会主義）社会主義の危機 \rightarrow 日米戦争の根柢を暴く \rightarrow 日米戦争の根柢を暴く

（日本）日米戦争の根柢を暴く \rightarrow 国際主義の根柢を暴く \rightarrow 国際主義の根柢を暴く

正義33行 \rightarrow 脱社会主義勢力 \rightarrow 日本社会主義の社会主義勢力
（日本）国際主義の根柢を暴く \rightarrow 日本の危機及早解決と総対決せしめ
上段33行 \rightarrow 増加せしめ

（日本）起つたる社会排斥 \rightarrow またおこる社会排斥

正義33行、無法改正一派 \rightarrow 型法改正正義一派

（日本）日本危機及早解決を暴く \rightarrow 社会主義の根柢を暴く

（日本）和風主義を紛糾せしめ \rightarrow 和風主義の合流を紛糾せしめ
（日本）義理の前進せしめ \rightarrow 型法改正の前進せしめ、アーリアニズム

（日本）正義 \rightarrow 不正 \rightarrow 正義